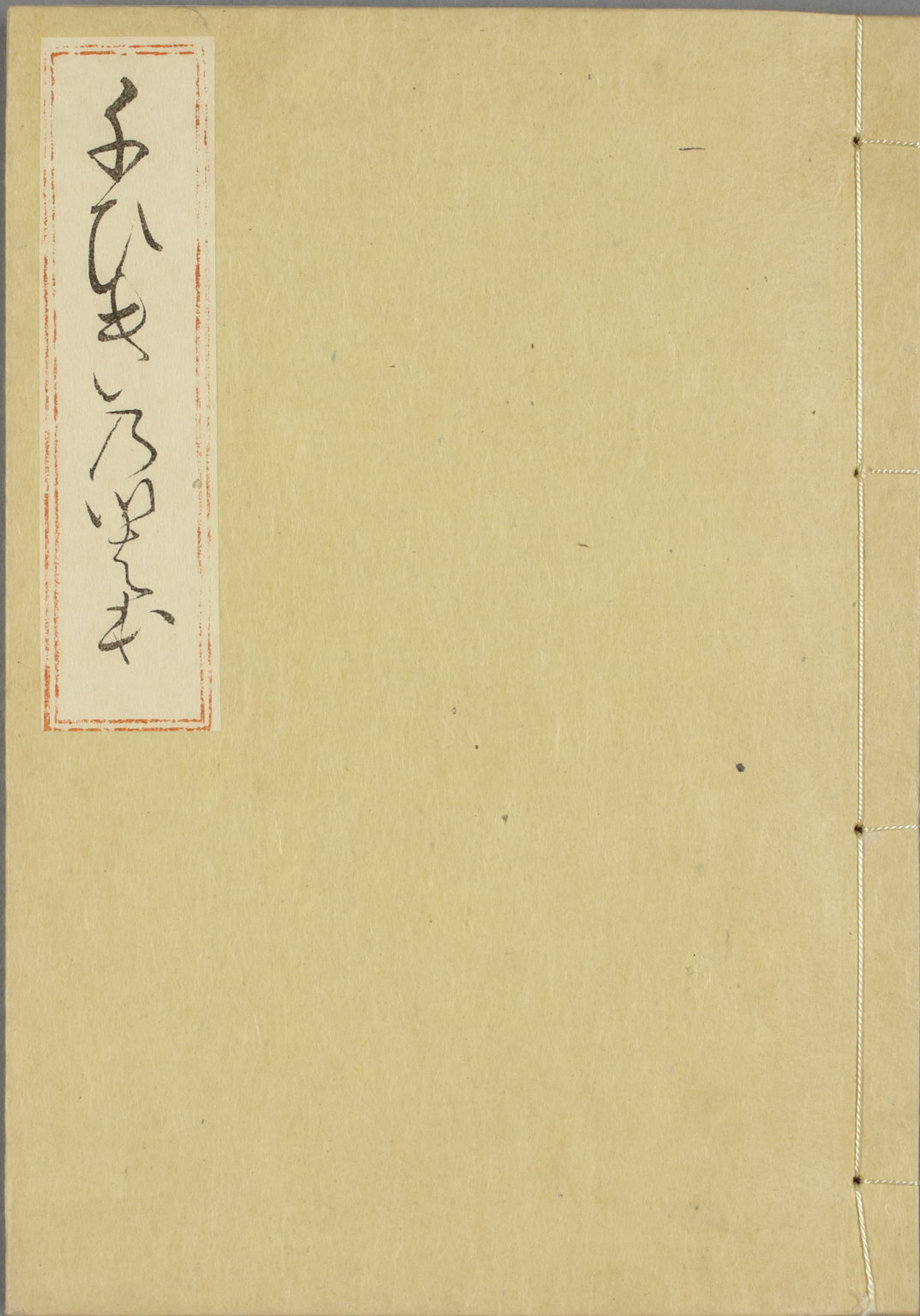




Handwritten text in a vertical column, enclosed in a red rectangular border. The characters are in a cursive style, likely representing a name or title in a non-Latin script.

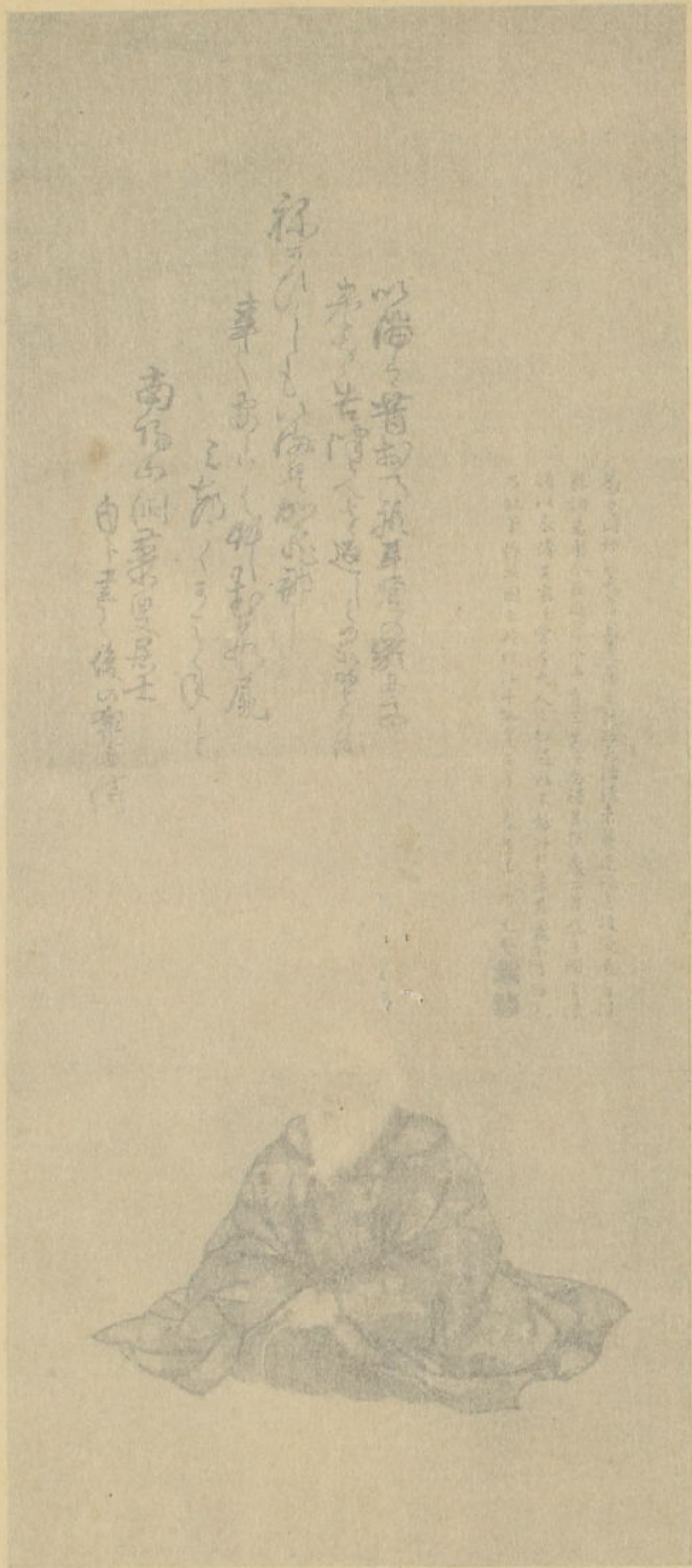


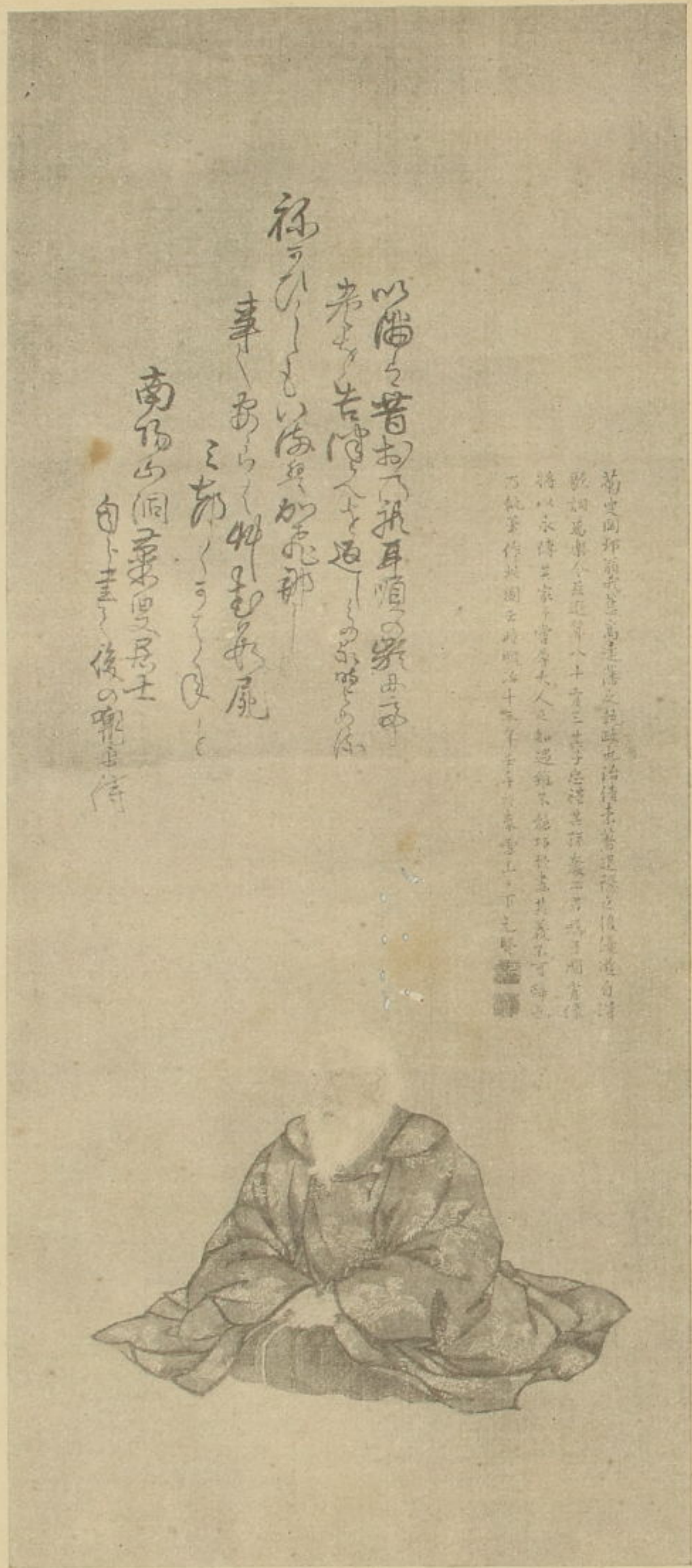
千  
曳  
の  
巖

菊  
曳  
詠



七十二  
歳  
南  
溟  
画





南無阿彌陀佛  
 由... 後の...

善悪の道を行きつゝ後つゝのたゞの  
中山の山を越へてゆくもまた  
まゝのまゝの道はよひ午引のいそ  
よふのうらやまの道はよひ  
のかたけの道はよひの道はよひ  
まゝのまゝの道はよひの道はよひ  
はまのいそよひの道はよひの道はよひ  
まゝのまゝの道はよひの道はよひ  
まゝのまゝの道はよひの道はよひ  
まゝのまゝの道はよひの道はよひ  
まゝのまゝの道はよひの道はよひ

春の来ぬ立ちわづらふといふ年もなく  
 天の戸を安らにあけて春は来ぬ立ちわづらふといふ年もなく  
 大空のなりそめしより年毎に春立つといへばのとけかるらむ  
 今朝は早や霞を帯びていづこ日に春の姿を見初めつるかな  
 萬代をとふる春の初風になべてなびかぬ民草もなし  
 おくれじと霞もともに立ち初めて春を粧ふ世のけしきかな  
 はつ日影匂ふあしたの峰の雲霞にかへて立ちわかるらむ  
 踏み分けし跡こそ見えね山里の雪の中にも春は来にけり  
 いと早やも瀧の水は聲立てぬけふより春といはぬばかりに

春の歌

春の歌

立春朝 天の戸を安らにあけて春は来ぬ立ちわづらふといふ年もなく  
 立春天 大空のなりそめしより年毎に春立つといへばのとけかるらむ  
 立春日 今朝は早や霞を帯びていづこ日に春の姿を見初めつるかな  
 立春風 萬代をとふる春の初風になべてなびかぬ民草もなし  
 立春霞 おくれじと霞もともに立ち初めて春を粧ふ世のけしきかな  
 立春雲 はつ日影匂ふあしたの峰の雲霞にかへて立ちわかるらむ  
 立春雪 踏み分けし跡こそ見えね山里の雪の中にも春は来にけり  
 立春氷 いと早やも瀧の水は聲立てぬけふより春といはぬばかりに

立春水 若水に汲めやと春の初風の氷をたたく庭のいさら井  
けさよりは牛の車を引きかへて都の手ぶり春めきにけり  
立春都 浅間山峰の煙に立ちそひてけさ珍なる春霞かな  
早春山 立ち越ゆる春を留むる人も無し戸さぬ御代の逢坂の關  
早春關 若蘆のつぐむ見れば氷居しいさゝ小川も春や來ぬらむ  
早春川 さゝ波や鳩の古巢もゆゑぬ岸の氷も今朝はとけたる  
早春湖 鹽釜の浦漕ぐ船の綱手繩ひきも曳かすも春は來にけり  
早春浦 かも山の裾野を分けて引かばやな是も二葉の松の千歳を  
野子日 子の日する野邊の小松をわが宿に移して千代を共に經なまし  
子日松 はるかなる君が齡のためしには子の日の松の千代を引かまし  
子日祝

山霞 むら山はよそにへだてゝ春霞畝傍をゝしと立ちかくすらむ  
嶺霞 葛城の神ならなくに春來れば霞を渡す峰のかけはし  
野霞 飛火野の下崩急ぐ春ぞとは煙にまがふ霞にぞ知る  
關霞 四方の海静けき御代も年のはに關守るものは霞なりけり  
徑霞 道しあればおどろが下も春分けて春は霞を敷き渡すらむ  
橋霞 古りにける長柄の橋を春毎に渡し代ふるは霞なりけり  
江霞 田鶴さには群るゝ入江の夕霞こゝや難波の葦邊なるらむ  
瀧霞 春霞立ちな隠しそ山姫のおりてかけたる布引の瀧  
河霞 梅津川かすむ夕の筏師は花の匂ひをしるべにや漕ぐ  
海霞 伊豆の海や沖の小島は霞めども浪こゝもとに寄る聲のする

湖 霞 近江の海八十の泊はありなめど霞まぬ方もなき夕かな  
濱 霞 八百日行く濱の真砂の有敷をよませじと霞や霞棚引く  
島 霞 松島や千島はいつか消えはて霞の海となりけるかな  
渡 霞 かぢのとはつばらなれども夕霞渡りわづらふ旅人や誰れ  
野 霞 みちのくの忍の里の名もしるく霞の奥となりけるかな  
舊巢鶯 花散らば歸らんものとなり証きて古巢や出づる谷の鶯  
初 鶯 梅の花咲かぬかぎりの鶯はまたく旅寐の心地こそせめ  
雪中鶯 雪深き谷の古巢を立ち出で、春有りけりと鶯の鳴く  
曉 鶯 曉の寺おこなひに後れじと啼く鶯も法の聲かや  
朝 鶯 窓近く待つとは知らず鶯は朝寐いさむる聲にこそなけ

夕 鶯 花ゆるゑに暮るゝを惜しとかげろひの夕かたまけて鶯の啼く  
里 鶯 春ながらまだ風さゆる山里は物うぐひすの聲ぞ稀なる  
山家鶯 尋ね入る人もある世に山里を出づるもはかな春の鶯  
竹 鶯 竹のよも我がよも春と鶯の窓ちかく啼く聲ぞ聞ゆる  
寐覺鶯 曉の夢おどろかす鶯は八聲の鶏にいつ習ひけむ  
野若菜 占野行き紫野行き摘みためん今日の若菜も我が君のため  
原若菜 朝風はまださゆれども下萌ゆる若菜を見れば春日野の原  
澤若菜 廣澤のいけるかぎりは年毎に根芹の白髪我が物にせむ  
水邊若菜 我が影をうつして共に摘まばやな澤邊の若菜水の深芹  
田若菜 神祭るけふの手草に摘みはやせみとしろ小田のゑぐの若たち



岡 残 雪 我がまきし袖かとばかり水莖の岡のやかたに残る白雪  
竹 残 雪 武藏野のはらはねばこそ消え残れ尾花が袖の去年の白雪  
木 残 雪 世の人の心いられを慰めて花待つ枝に残る白雪  
餘 寒 月 冴えかへる雪けの空に眺むるも朧はおなじ春の夜の月  
餘 寒 風 松風の聲すさまじく聞ゆなり春やはいづこ春の山里  
餘 寒 氷 道のへになびく柳の下水もまだ薄氷る春浅くして  
梅 雪 薫物の匂ひや添へんまだ咲かぬ梅の梢の雪の初花  
梅 風 霞めども梅の宮居の春風はよそにまがはぬ花の香ぞする  
夜 梅 香をとめて折らば折りてめ春の夜のあやなき闇の梅の梢も  
故郷 梅 ふる郷と誰かいふらむ春毎に梅は昔の香に匂ひつゝ

里 梅 春來ぬといはての里の總角もまづ咲く梅に時をこそ知れ  
庭 梅 人訪はぬ律の庭の梅の花鏡の裏に咲くこゝちして  
簷 梅 空薫の匂ひを添へて咲かぬ間もよそに異なる軒の梅が枝  
隣家 梅 中垣の隔てはあれど梅が香はあした夕の風のまに〜  
梅 映 水 池の面の氷にかはる花の影けさより水も梅が香ぞする  
梅 薫 枕 梅が香を隙漏る風の誘ひ來て今を春べとつげの木枕  
梅 香 梅が香を道の行手に移し鞍足搔早めて家苞にせむ  
折 梅 玉鉾の行手に手折る梅が枝は妹に見せむの春心かも  
若木 梅 移し植ゑし若木の梅の初花よ我が老の世の挿頭ともなれ  
紅 梅 白雪の中より匂ふ宿の梅のから紅に咲くぞあやしき

落 梅 梅の花散りても匂ふつぼの中は朝きよめすな伴のみやつこ  
柳 露 白露の玉のみすまるうなげても里びて見ゆるふし柳かな  
池 柳 春柳も寝きたれ髪やけづるらむ池を鏡に打ち向ひつゝ  
門 柳 春柳の眉の霜さへうちとけて老いせぬ門に緑添ふ蔭  
岸 柳 怠らず岸もとゆすり行く水の心に習ふ風の春柳  
河 柳 小舟漕ぐ霞のみをの綱手には風の柳の絲をこそよれ  
路 若 草 雪分けし駒の蹄の跡ならむたま／＼青む路の若芝  
岡 早 蕨 家苞にいざや折らまし旅人のゆきゝの岡に萌ゆる蕨を  
樵 路 早 蕨 杣人のかへさの道のかぎわらび引留めんと萌えや出でつる  
山 春 月 此頃は月も街に迷ふらむ出で入る山も霞こむれば

關 春 月 願はくば空に霞の關するて夜渡る月を留めてしがな  
江 春 月 浪速江や霞む浪間にかくるともみづと語らん春の夜の月  
春 曉 月 大空もまだ霞まねばさし櫛の曉かけて月は見るべく  
春 月 幽 今ぞ知る老の數添ふ涙にも月をかすむる習ありとは  
朝 春 雨 春雨はいつ降り出で、此寝ぬる朝けの袖をまづぬらすらむ  
夕 春 雨 音立てし軒のしのぶの玉水に霞む夕の雨を知るかな  
谷 春 雨 時くれば谷のはざまの埋れ井も水増されとや春雨の降る  
野 春 雨 夕霞分けて降る野の春雨に遠近人や袖かざすらむ  
庵 春 雨 春來れど昔に返る色もなし草の庵はながめのみして  
春 駒 むら消えの雪間に遊ぶ若駒やこゝも尾ぶちの牧といはまし

岡 雉

續つみ学なすなす春日ながらも暮れぬとや入日の岡にきこす鳴くらむ

野 雲 雀

葦咲く野をなつかしみ夕雲雀霞をおつる聲急ぐなり

路 雲 雀

夕雲雀かすむみ空に聲すなりかへさの道に迷ふなるらむ

歸 雁 知 春

御越路はまた白雪も消えなくに何を春べとかへる雁がね

曉 歸 雁

有明の月はつれなき曉に心づよくもかへる雁がね

夕 歸 雁

夕暮の霞を分くるかりがねはいづくの空に宿かしめたる

夜 歸 雁

かへる山有りとし聞けば夜をこめて雁も越路に思ひたつらむ

歸 雁 連 雲

明け渡る峰をわかるゝ横雲を翅にかけてかへるかりがね

峰 歸 雁

越路には雁かへる山ありと聞くと峰高ければ行きうしといへ

海 歸 雁

宿借らん方こそ知らね白波を翅に分けてかへるかりがね

遠 歸 雁

啼く聲も霞のをちに聞ゆなり今を限りの春の雁がね

歸 雁 似 字

薄墨の夕にかへる雁がねは文字の數さへ讀みも解かれず

歸 雁 幽

三日月のほのめく空に聲はして霞をかへる春の雁がね

春 山

淺綠染めかけたりと見しや何春は柳をかつらぎの山

春 野

白雪の降るから小野もいつしかと緑にかへる春の色かな

春 關

春雨のもるにまかせて不破の關朽ちし庇も年やへぬらむ

春 川

山川も岸の柳の影そひて水もみどりに霞む春かな

春 海

焼く鹽の辛き世渡る海土の子も春は霞の海をこそ汲め

野 遊

春の野につばな葦の花蕊いやさや敷きて此日暮らさむ

遊 絲

綻びし霞の衣縫はんとや暮るゝも知らであそぶ糸遊

待 花  
栽 花  
尋 花  
初 花  
見 花  
翫 花  
折 花  
交 花  
曉 花  
朝 花

花を待つ高嶺に匂ふ白雲は嬉しきものゝうらめしきかな  
吹寄らん風に知らせず移し植ゑば青葉交りの花も見てまし  
春山の霞男と我れならむ嶺越し山越し花を尋ねて  
待ち戀ひし吉野の雲の色づくは今日とけ初めし花の下紐  
飽く世なき花にもあるか見る度に長かれと思ふ老の命の  
咲く花に移る心はしかすがに親もいさめじ君もとがめじ  
折りかざし下る山路のさくら花雲のたち居とよそに見るらむ  
老が身の交らば花に笑はれむ花も浮世の色ならずやと  
有明のつれなかりしは曉の花見よとての情なるらむ  
朝日影匂ふ櫻の花心世の人皆に咲かせてしかな

夕 花  
夜 花  
山 花  
嶺 花  
谷 花  
岡 花  
杜 花  
野 花  
關 花  
瀧 花

暮れぬとも立たまくをしき花の蔭夜半の嵐の後めたさに  
月も澄め花も咲かなむ見る人も年に稀なる今宵すぐすな  
春も猶雪にならひて御吉野の山は櫻にうづもれにけり  
山がつも通はぬ峰の櫻花うしろ安くや春をおくらむ  
足引の谷ふところに今年より春知り初むる兒櫻かな  
片岡の松に習はゞ櫻花百とせ千とせ飽くまでも見む  
いつまでも散らぬ櫻の種しあらばなげきの森の名をも忘れむ  
櫻散る片野のみ野に行き暮れて花の下臥せんよしもかな  
今も猶花の關守すゑ置かむ櫻にかすむ逢坂の山  
嵐山となせの櫻散り初めてむら濃に染むる瀧の白糸

禁中花 吹き通へ櫻襲の袂には大内山の花の下風  
 社頭花 宮柱太しきたてしあたりには散ること知らぬ花もこそ咲け  
 古寺花 入相の鐘にもなれて初瀬山残る櫻の花もありけり  
 故郷花 問はばやなふりし都のもと櫻昔の春を猶慕ふやと  
 里花 山里と人はいへども春はたゞ櫻襲のみ吉野の奥  
 山家花 のがれ住む山のかひには春毎に軒端を埋む花の白雲  
 庭花 夕鞠の聲のあとより散る花は空に知られぬ庭の白雪  
 閑居花 浮世には絶えてましらと鳴く聲を假ほの庵の花の友どち  
 花雲 偽のなき世なりせば白雲を花と見つゝも春をへなまし  
 花雪 打向ふ外山の櫻雪よりもを簾を捲かする折ぞ多かる

花梢 横雲はたちわかるれど向つをの梢に残る花ぞ久しき  
 花枝 手な觸れそ浮名龍田の花の枝に白波よると人や咎めむ  
 花本 木の下に散り來る花を今宵もや梅に借りて草枕せむ  
 花根 花は根にかへると聞かば若草の妻や待つらむ妹や戀ふらむ  
 花挿頭 時過ぎしあられ走りのゆふ花に通へと櫻折りかざしつゝ  
 花手向 幣しろに春は櫻を手向けまし秋は紅葉も神のまにノ  
 花麻 龍田彦祈らば風も吹き寄らし大ぬさ小ぬさ花を備へて  
 花袂 散る花の雪をめぐらす袂には荒ぶる神も心なぐらむ  
 花衣 佐保姫の霞の衣色増して花の盛をよそに告げつゝ  
 花鏡 立よりてとはんも羞し鏡山春におくれて花咲かぬ身は

花 錦 雪と降る櫻にぬれて歸らまし花の錦は身におはねども  
 花 匂 下臥のひと夜をつとに誇らまし花の匂ひを袖に移して  
 花 色 吉野山雲も色づくこの頃はいつれを花と分きて尋ねむ  
 花 便 訪へかしといはぬばかりに咲く花は山里人の便なるらむ  
 花 主 かれ果てし人目も草も見え初めぬ花こそ主春の山里  
 花 面影 面影は雲も櫻にかよへども咲の盛の花はまがはじ  
 花 形見 日並べて馴れし櫻の花衣是もや春の形見なるらむ  
 惜 花 鶴龜も住まふ蓬の島ならば櫻も千代にあえましものを  
 落 花 今朝ははやみつよつふたつ散り初めて物思はする花の下風  
 残 花 鶯の古巢に歸る聲とめて残る櫻の花や尋ねむ

三月三日 三日月の姿をこゝに映し來て千代も汲まばや桃の盃  
 桃 花 惜みたる春しもいつかくれなるに夕日眩こぼき桃の花園  
 梨 花 櫻麻のをふのうらなし恨みなよ吉野の春にあはぬばかりを  
 山田苗代 豊なる秋のたのみを小山田に啼くや蛙の聲にまかせむ  
 路 苗代 佐倉人其船借しね畔道は苗代水に見えかくれする  
 河邊苗代 谷川の細き流も千町田にまけばいくらの秋を見すらむ  
 夕 蛙 ゆたね蒔き水口祭る祝詞には小田の蛙の夕暮の聲  
 田 蛙 鶯の唄に歌ふ夕暮に小田の蛙も聲あはすなり  
 野 董 若草の摘まほしきは昔誰れ妹とすみれの花の夕榮  
 庭 董 紫のみ庭の春に移るとも董よ野邊の色を忘るな

摘 董 摘みためし野邊の董の花筐都のつとに提げし子や誰れ  
松下躑躅 夕暮をまつ火串と見えつるは下蔭照らすつゝじなりけり  
躑躅 紅 妹がひく赤裳の裾と見るばかりつま屋の庭に咲く躑躅かな  
池 杜 若 をし鳥も来てこそ遊べ 杜若紫匂ふ池の汀に  
澤 杜 若 杜若荒田の澤に咲きぬれと思ひ上れる色は變らず  
山 吹 露 逝く春を惜しといはねの山吹も袂の露は乾く間もなき  
夕 山 吹 春の日の暮るゝを惜しといはぬ色に咲く山吹や花の儂  
路 山 吹 敷妙の妹ならなくに携へてゆかまほしきは路の山吹  
池 山 吹 妹に似ば立ち寄りて見む池水の鏡に映る山吹の花  
河 山 吹 山吹も春の日數も流るめり散るをもとめよ井手の柵

島 山 吹 たちばなの小島が崎に宿借りて花も旅寢の岸の山吹  
岸 山 吹 舟つなぐ岸の山吹咲きにけり春の港や間近かるらむ  
里 山 吹 里人となりてしもがな山吹の咲の盛の井手の玉川  
庭 山 吹 庭は野となりぬる後も春毎に咲かではいかでやま吹の花  
籬 山 吹 妻ごめに八重垣つくる山吹の花の眉引憎くしもあらず  
夕 藤 紫の雲にまがへて見んものは夕風そよぐ松の藤浪  
岡 藤 片岡の松の緑に紫の藤がさねこそよしはありけれ  
池 藤 影うつる池の鏡の藤浪は風たゝぬ日も靜心なし  
江 藤 忘草生ふとは聞けど住の江の春を忘れぬ岸の藤浪  
浦 藤 紫の藤江の浦に春かけて問はでもしるき花ぞ匂へる

岸 藤

紫に匂へる岸に船寄せて袖にもかけん藤の花浪

松 藤

さきかへて千歳も經んと松が枝に齡を契る藤蔓かな

春 欲 暮

花は根に鳥は古巢も尋ねまし春やいづくを住家にはする

暮 春 月

暮れて行く春の名残と見るものはまだ朧なる有明の月

暮 春 雲

花は根に鳥は古巢の春ぞとも知らでや残る峰の横雲

暮 春 霞

佐保姫も霞の衣ぬぎかへて縁に移る時ちかみかも

暮 春 鐘

今日と暮れ昨日と過ぎて月花にうかれし春も入相の鐘

留 春 不 駐

佐保姫の霞の衣花の袖引き留むべき春の知らなく

惜 三 月 盡

佐保山の神に祈らば留るべみ暮れ行く春も散らふ櫻も

三 月 盡 夕

夕風に靡く柳は近く春を引き留めんと糸や垂れたる

三 月 盡 夜

家つ鳥うたはんほどに夜は更けぬ今こそ春の限なりけれ

閏 三 月 盡

然りとて又咲く花はあらねども後の彌生も別かなしも



夏の歌

首夏

花散りて縁にかはる袂には厭ひし風も好もしきかな

朝更衣

夏もまだ木曾の麻衣あさければ朝な夕の風ぞ身にしむ

更衣惜春

花染の袖は縁にかふれども猶みそかけに春やとゞめん

(御衣掛)

餘花

鶯も老を啼くなる山蔭にありとばかりの花はめづらし

新樹

花散りて若葉にかはる今日しこそ青根が峰といふにやあらむ

路卯花

降ると見てゆきなやむこそ愚なれ袖に積らぬ道の卯花

籬卯花

卯の花のさける籬の朝じめり音なき波や袖に觸れたる

田家卯花

豊年の貢の雪と見るまでに卯の花咲ける小田の假庵

卯花似月

久方の桂の里は闇ぞなき月にまがへるうつ木咲く頃

卯花似雪

有明の月にまがへし卯の花を雪かたとたどる黄昏の道

葵

加茂川やなみにはあらて幾歳か葵かけたるをみの衣手

待子規

鳴け聞かん聞かばなかなのつな引に今年は負けよ山郭公

尋子規

雲に飛ぶ薬もがもな時鳥高嶺別れて猶も尋ねむ

始聞子規

花ならばつぎて見ましを初聲は夢かたとたどる時鳥かな

人待時鳥

古いぬれば人づてならで初聲を聞かん期もなき時鳥かな

子規未遍

時鳥きのふはかしこけふはこゝまた里馴れぬ聲ぞゆかしき

月前郭公

葎生もいとほで照らす月影にならひて來鳴け山時鳥

雲外郭公

此夜らはいづくの雲に宿るらむまた聲もせぬ山時鳥

雨中子規

紅のふり出で、啼く時鳥色は見えねと袖の村雨

曉郭公

月影の有明山のほとゝぎす待ちし甲斐ある曉の空

曙子規

子規雲の絶間になく聲は花におとらぬあけぼのゝ空

朝杜宇

ほとゝぎす庭の淺茅の朝濕りしめやかに鳴く聲ぞ待たるゝ

夕子規

時鳥夕かたまけてしば鳴くは今宵の宿や求め詫びたる

夜子規

あはれにもさ夜の寢覺をよそながら知りてや來鳴く山時鳥

山時鳥

足引のみ山がくれに住む人もよそにはなさて鳴く時鳥

杜郭公

今日もまたあはての森の時鳥いつまで忍ぶ初音なるらむ

岡子規

不如歸いまきの岡に聲すなり是や今年の初音なるらむ

野子規

眞菅おふる荒野の末に聲立てゝまだ里馴れぬ時鳥かな

原郭公

忍ぶには限ありてや子規武藏野の原に今日ぞ鳴くなる

關子規

猶しばしこゝに語らへ時鳥まだ曉の關のくきぬき

浦子規

四つの緒の調にかよへ照る月のあかしの浦に啼く子規

渡郭公

子規こゝと答ふる聲もなし隅田の渡やいづこなるらむ

夢中子規

子規今日も夢かとたどるまでさだめかねたる肱枕かな

寢覺子規

梅が香のとひし枕は時過ぎて寢覺おどろく山ほとゝぎす

獨聞子規

あれ聞けと語らふ人もなき床に涙を添ふる時鳥かな

郭公幽

今は世を遁れんとてのすさびかもみ山の雲に鳴く郭公

田家早苗

賤の女の手わざいとなき門田にも豊に見ゆる露の玉苗

早苗急

五月雨のふるの水田もいとほすて取れや玉苗節立たぬまに

早苗多

野田山田後れ先だつ苗はあれど植うるはおなじ萬代の民

池菖蒲

浮草はさもあらばあれあやめ草軒端に葺かば根ざせとぞ思ふ

沼菖蒲

陸奥の淺香の沼に生ふれども其根は深きあやめ草かな

苧菖蒲

山城のよどのゝ菖蒲かりそめに枕かはさん妹だにもなし

盧橘薫風

むかし思ふ花橘の追風はもとほとゝぎす來よと吹くらむ

雨中橘

故郷を忍ぶ軒端の橘に添ふる涙や夜半のむら雨

簷立花

百敷やみ階の軒の立花は誰が袖ふれし匂ひなるらむ

棟

ゆかりある色には咲けど花樗たが住む里の垣根なるらむ

夜五月雨

此頃は星さへ見えぬ下闇に又葺き添ふるさみだれの雲

山五月雨

五月雨に曇らば曇れ鏡山老の姿のうつらんはうし

杣五月雨 斧の柄も朽木の杣となりやせん晴間も見えぬ五月雨の頃  
橋五月雨 さみだれの降そめしより竹川の橋のつめにも遊ぶ子ぞなき  
江五月雨 五月雨の日數ふる江となりぬれば難波の蘆も波の下草  
瀧五月雨 おりてほす暇こそなけれ五月雨に亂れておつる布引の瀧  
川五月雨 五月雨の日をふるまゝに名取川瀬々の埋木くちものこらじ  
湖五月雨 鴉の海や瀬田の長橋雲おりて名のみになりぬ五月雨の頃  
浦五月雨 藻鹽焼く煙も立たず五月雨に何をかすまの海士のなりはひ  
古宅五月雨 壁におふるいつまで草の五月雨にくちぬは軒の瓦ばかりか  
夜水鶏 こゝかしこ叩く水鶏にはかられて夏も夜を寝ぬ里ぞ多かる  
夏夜 月もよし螢も清し夏の夜は寝ぬに明けぬといふぞうべなる

雲間夏月 さらでだに見ん程もなき夏の夜の月は雲間をなど求むらん  
水上夏月 立ち寄りていざや翔ばん影もよしみもひもさむし飛鳥井の月  
樹蔭夏月 茂りあひて蔭もくら馬の梢よりこゝに移しの月の涼しさ  
夏月涼 白妙の袖のひとへに待ちとりて霜と見る夜の月の涼しさ  
夏月易明 宵の間に明けぬと神や歎くらむ葛城山の夏の夜の月  
瞿麥露 垂乳根の親と呼ばれん人はたゞ露ながら見よ撫子の花  
庭瞿麥 花毎に置く白露をかざしにて粧ひ立てる庭の撫子  
夏草露 あらはれてまだ穂に出でぬ篠芒秋より先に露は置けども  
杜夏草 昨日かも雀隠れと見し程にいつか老蘇の森の夏草  
野夏草 東の間に雄鹿の角もかくるまで芒高かや夏更けにけり

徑夏草  
庭夏草  
夏山  
夏野  
照射  
鵜川  
夜螢  
橋螢  
水上螢  
池螢

さみだれに行き交ふ人も跡絶えておのれと茂る路の夏草  
鳴く虫の聲待つ園の夏草は今より露も拂ひかねつゝ  
筑波山は山繁やましげゝれば雫の田井に月も宿らす  
さを鹿の肩すぐるまで生ひにけり夏野の草は誰かあくべき  
ともしする松の齡に契らんと夏山蔭に寄る鹿あはれ  
鵜飼等に問ひても見まし後の世の闇をも照らす篝なりやと  
窓の中は照らす螢もあればとて片眠りする夜半の燈火  
波のほに燃ゆる螢を思ひにて待つ夜悲しき宇治の橋姫  
夕づゝの影かと思れば川上に行方知られぬ螢なりけり  
夏虫のよるかの池の萍に花とみだれて飛ぶ螢かな

江螢  
澤螢  
浦螢  
草螢  
螢似露  
螢似玉  
蚊遣火  
垣夕顔  
池蓮  
氷室

難波江や蘆火の影を思ひ出でて暮るれば照らす螢なるらむ  
ひたの音はよその夕と思ふらん野澤の螢たゝんともせぬ  
いさり火の影も消えぬる五月雨にうら見よとてや螢飛び交ふ  
古草の根より生れて新草の露を乳房にそだつ螢か  
芥川露かと問へど消えもせて燃ゆるは岸の螢なりけり  
玉ならば手にもまかまし項<sup>うな</sup>げても行かましものを飛ぶ螢かな  
有明の月影かくす横雲は宵の蚊遣のなごりなるらむ  
宮人に問はれし花の夕顔も賤が垣根に口惜しの世や  
池水はよし濁るとも花はちす心は澄める宿世忘るな  
氷室山夏なき蔭を求むれば雪とあざむく花うつ木かな

夕立風

夕立の雲間を洩れて山風は雨より先に音立てにけり

夕立雲

こゝかしこ降りも降らずも風交かぜまに山めぐりする夕立の雲

山夕立

富士の嶺はまだ雪白く雲晴れて夕立つ方や足柄の山

河夕立

水無瀬川筏さまくなりにけり夕立雲もまだ晴れぬ間に

夕立早過

渡し舟早も寄せ來といふ聲のあとより晴るゝ夕立の雲

杜蟬

鳴く蟬の聲もしぐれて聞ゆれば秋のけしきのもりといふらむ

樹蔭蟬

秋近み蟬の羽袖に風ふれて夕涼しき檜の下がげ

松下水

風の音波の響も玉琴の調に通へ松の下水

夕納涼

暮れぬとて花をわかれし袖なれど月を待ちとる夕涼しも

樹蔭納涼

夏引のいとゞ涼しき夕かな風にあやおる青柳の蔭

納涼忘夏

住の江や今は暑さも忘草つみてやゆかむ見てや歸らむ

六月祓

蛸の聲もきのふと過ぎぬめり暑さも夏のはらへしぬれば

秋の歌

立秋朝

今朝見れば庭の玉笹露ふかし一夜の程に秋や來ぬらむ

立秋天

天の川今日立つ秋にあらはれて星の逢瀬を待つけしきかな

立秋日

薄れゆく日影を見れば此夕西の空より秋は立つらむ

立秋風

今日よりと初秋風は告げねともさすがにうすき蟬の羽衣

立秋露

知らでだにあるべきものを白露の今日より秋とつげの木枕

初秋曉

秋來れば寢覺むる老の習をも忘れてかこつ曉の鐘

初秋夕

風の音はまだ變らねど夕暮は秋の心と早やなりにけり

初秋夜

初雁もまだおとづれぬ秋の夜をいかに知りてか露の手枕

初秋雲 山姫の立ち舞ふ袖の白雲もまだ色添へぬ初秋の空  
初秋衣 蜻蛉羽の衣の袖に通へども猶にくからぬ秋の初風  
待七夕 天の川船よそひして待つほどはいかに夜長き初めなるらむ  
七夕雲 七重八重雲の衣は重ねても逢ふ夜は一夜星合の空  
七夕霧 たなばたの逢ふ夜面無み暮れぬ間に八重垣つくる波の浮霧  
七夕橋 かさぎの羽がひの橋も星合の秋より秋をかけてしも待つ  
七夕衣 戀衣かへして待つと知らせばや棚機つめの夜の夢路に  
七夕船 久方の月人男船寄せよ星の逢瀬は今宵ばかりを  
七夕後朝 逢へば又別の涙さしぐみて乾く間もなき棚機の袖  
曉露 此寝ぬる曉起きの袖を見よ夢にや分けし茅生の露原

朝露 朝ごとの露の宿りとなるものは草葉の袂きぬくの袖  
夕露 草の葉を拂ふのみかは暮れ行けば露吹きむすぶ野邊の秋風  
夜露 小夜衣かへす袂に置く露は夢に逢ふべき人の涙か  
野露 やつれたる草の袂に宿借りて露は野伏となり果てにけり  
原露 秋風の拂へば結ぶ白露や世は定めなき仇し野の原  
徑露 濡れぬとも何か厭はんさす竹の君に仕ふる道芝の露  
故郷露 玉敷のあたりも野らとなりしより心安くや露の置くらむ  
庵露 萩薄かりほの庵の夕暮は野邊にもまさる露のふき草  
庭露 はらはねば玉敷く庭となりにけり葎の宿の露の曙  
草露 末の露本の雫とわかれても根ざしは同じ野邊の秋草



浅茅露 浅茅生の色なき庭も朝毎に露の花こそ咲きまざるなれ  
 苔露 猿叫ぶ山路の奥の下りこけこれもよすがと露の置くなる  
 袖露 長秋の千とせに宿る露はあれど涙は添へぬ菊の袖垣  
 秋露 秋の野の草葉の枕かりそめの契なれども露は深しな  
 夕萩 門さして主なき宿と答へても折々たゞく萩の夕風  
 夜萩 更くる夜の露や下葉に重るらむ聲遠ざかる軒の下萩  
 江萩 誰が植ゑていつよりこゝに住の江や蘆の絶間の萩の一叢  
 庭萩 人訪はぬ庭の萩原聲立てよ淋しき夜半のなぐさめにせむ  
 簷萩 中川の昔の契思ひ出て軒端の萩に風かよふなり  
 野萩 宮城野の秋よいかにと訪ひ來ればまづ露結ぶ糸萩の花

行路萩 玉鉾の往き來の袖の花摺に眞萩の盛しるくもあるかな  
 河萩 秋立たば野路の玉川來ても見よ萩の錦は人も咎めじ  
 崎萩 紫の野島が崎に住む蟹の袂にはおはぬ秋萩の花  
 庭萩 秋の野に庭は作らむさを鹿の眞萩に通ふ聲もありやと  
 女郎花靡風 朝露の起きてはながめ夕露の通へば靡く女郎花かな  
 野女郎花 秋の野に宿りは借れど女郎花日なし色に咲くぞつれなき  
 徑女郎花 女郎花道の行手に立てれども戯れにくき色ぞ見えける  
 岡薄 夕暮を告げて尾花や招くらむ入日の岡に宿り借れとか  
 原薄 花薄袖をば風の拂へども裾野の原の露やいかなる  
 徑薄 道の邊の一本薄穂に出でゝ招くも情秋の夕風

苜荳亂風 穂薄は招く夕もあるものを道妨げの風の苜荳  
 岡苜荳 賤の男が持てる利鎌にかかる荳は岡邊の秋を見果てざるらむ  
 庭苜荳 根こじ來て風に亂れむ程もなし籬の中の庭のかる荳  
 蘭薫風 秋の野の風に匂はす藤袴誰が袖の香を移してか來し  
 蘭露 置く露に色はなけれど蘭うす紫の色もなつかし  
 野蘭 さゝがにのいとなき野邊の夕風に綻び初めし藤袴かな  
 籬槿 玉垂のを籬もる影と見えつるは露の籬の朝顔の花  
 曉虫 鳴く虫も曉聲となりにけり秋の夜長き程を知らせて  
 夕虫 夕月の影待ちわびてきりくす蓬が袖に聲しきるなり  
 夜虫 聞く人の心々に嬉しともつらしとも鳴く夜半の虫の音

野虫 秋の野の花の錦もはたおりの聲の綾より作り出でけむ  
 原虫 菅原や伏見の夢やさゆぬらむ人待つ虫の聲しきるなり  
 徑虫 夜をこめて驛路急ぐ旅人の過ぐるあとにも鈴虫の聲  
 庵虫 世の憂さを聞かじと作る庵にも秋は秋とて虫の音ぞする  
 庭虫 拂はねば坪の内なる蓬生の露にも音鳴く虫はありけり  
 閨虫 小夜更けて閨の灯火居眠れば枕に近く鳴くきりくす  
 聞虫 虫すらも父よ母よと鳴く聞けば袂絞らぬ曉もなし  
 曉初雁 咲き初むる花をわかれし曉を思ひ出でゝや雁は來ぬらむ  
 夕初雁 ほの聞くも袖は涙の夕暮に初雁がねや音をこぼすらん  
 夜初雁 立ちかへり物思へとや雁がねは又寢の夢をおどろかすらむ

雲間初雁 浮雲のうき事あれや鳴く雁の聲もしぐれてほの聞ゆなり  
山初雁 鏡山見て歎くらん天つ雁別れし春のけしきならねば  
峰初雁 一つらは高嶺の雲とまがへども後より續く初雁の聲  
遠初雁 常世より渡りこし路の雁がねは遠くて近き波の上かな  
近初雁 葦垣の間近き小田に聲するは今宵や宿をかりの一つら  
初聞雁 別れしも昔ならねど初雁の聲聞く空のめづらしきかな  
初雁幽 おろし來る風の便に聞ゆるは天つみ空の雁の聲かも  
朝鹿 戀ひ詫びて啼くさを鹿の歎より朝の霧の立ち上るらむ  
夕鹿 春日山ゆふかけたりと啼く聲は神に仕ふるを鹿なるらむ  
夜鹿 うみをなす長き夜すがら啼く鹿は道や迷へる妻や戀しき

山鹿 逃れ住む山のかひよと啼く鹿も宵々毎に妻は戀はずや  
谷鹿 我が影を妻ありけりと驚きて細谷川にを鹿立つらし  
岡鹿 獵人も忍ぶの岡と知らせばや夜すがら妻を戀ふるを鹿に  
野鹿 花薄粧ひ立てる秋の野にまじりて鹿も妻や戀ふらむ  
原鹿 今も猶矢並つくるふ狩人のありとは知らじ那須のさを鹿  
海邊鹿 琴の音に通ふともなきさを鹿も須磨の上野に聞けば悲しも  
田鹿 み吉野のたのむの秋を慕ひ來て年ありけりと男鹿なくなり  
野鶉 臥しおびて野分の後のかた鶉床はあれぬと鳴く聲のする  
江鶉 露寒き尾花がもとに床しめて眞野の入江に鶉鳴くなり  
里鶉 深草の里あれゆけば淺茅生のとこめづらにも鳴く鶉かな

曉 鳴 曉に數かく鳴を聞くたびに我が身の老も數へられつゝ  
澤 鳴 いく百羽搔きわづらひて露深き澤邊の床に鳴や伏すらむ  
田 鳴 露深き刈田の畔に伏しわびて霜をや拂ふ鳴の羽搔き  
秋 風 刈り果てし山田の小田の夕暮は風に鳴子の音のみぞする  
秋 露 早苗草そだてゝ露の玉ゆらに刈りてほすまで秋更けにけり  
秋 雨 いにしへを思ひ残せる夢もなし夜も長月の聞の村雨  
山 霧 時雨にはまだ程遠き山路をも今より隠す秋の初霧  
野 霧 松虫の聲はすれどもさすが又行先たどる野邊の秋霧  
關 霧 月影も秋は夜霧の立ちこめて清見が關の名をいかにせむ  
河 霧 妹脊山中絶えんとは思はねど立つ川霧のいとも苦しき

浦 霧 高砂の松に嵐の聲せずば霧分けわびん浦のあま舟  
駒 迎 引分けの使も今や立野なるつかれの駒に鞭や打つらむ  
八月十五夜 明日よりも猶有明の影はあれど半の秋の中空の月  
夕 月 三日月のほのめく影を見渡せは西の海より秋は來にけり  
夜 月 宵の間の雲さへ消えて中空に更くるともなき夜半の月かな  
曉 月 うたゝねの夢驚かす鶏の音にさむればやがて明くる月かな  
山 月 家苞はこれにますべき影ぞなき娘捨山の秋の夜の月  
嶺 月 山鳥のをの上にひとり澄む月はほろ／＼と散る涙をぞとふ  
谷 月 光なき谷となわびそ夜な／＼は月影しづく山の井の水  
柚 月 世の中のうきもなげきもこり盡せ月をばこゝに三尾の柚山

杜 月 月影も千枝に分れて世の秋を信田の森の楠の樹がぐれ  
岡 月 岡の屋に半の月の影澄めば明石の波は琴の音ぞする  
野 月 旅人は寝ぬに明けぬと恨むらむ月すむ秋の手枕の小野  
原 月 藪原や箒木ならぬ月影も明くればきゆる習ならずや  
關 月 夜な／＼の月も留めん須磨の浦や關守る人の有る世なりせば  
徑 月 露すがる袖にやとれる月影を道行振の苞とをいはん  
橋 月 夜な／＼の月のみ影は危さも忘れて渡る木曾の棧  
水邊 月 大原やおぼろの清水名にも似て月澄む秋はさやけかりけり  
池 月 水鳥も影におどろく夜半ぞなき月の夜頃の廣澤の池  
澤 月 飛び翔る澤邊の鳴の羽交より月影こぼす露のあけぼの

沼 月 かひ沼の鴛鴦の獨寝なぐさめて月影そはる浪のうね／＼  
江 月 夜光る珠と見るまでみさび江の浮草分けてしづく月影  
瀧 月 こきみだる影かと思れば瀧の糸に綾織る月の影にぞありける  
河 月 いつはあれどいづくはあれど影さへも隅田川原の秋の夜の月  
湊 月 今宵こそ月は澄みけれ近江の海八十の湊に影くばるまで  
湖 月 さし上る富士の高嶺の月影を波間にはこぶ諏訪の湖  
浦 月 波の音松の嵐も秋の夜は月にしらぶる唐琴の浦  
濱 月 我妹子とあひ寝の濱のむやみ舟月澄む秋は別れかねつゝ  
磯 月 こよろぎのいそがぬ草の枕をば幾夜かこゝに秋の夜の月  
汀 月 幾秋か月は汀にすみ馴れて波の玉藻のよるを待つらむ

崎 月 思ふことなき世なりけり庵原の清見が崎に照る月を見て  
島 月 松島や千島のエゾが見る目までさやけかれとや月は照るらむ  
潟 月 いつしかも月澄む秋となるみ瀧いを安くぬる蟹やなからむ  
泊 月 泊舟來よる渚に波あれて汐曇りする秋の夜の月  
渡 月 渡り守る里の男に事問へば月のすみだと答へこそすれ  
田 月 おしね刈る鎌の光はうすくともまは通ふ弓張の月  
都 月 花をのみ何かはいはん秋はたゞ月の都と呼ぶべかりけり  
禁 中 月 君が代は八重九重のうちまでも隅なかれとや月の照らせる  
社 頭 月 籬の川の末とめ行けば今も猶現に照らす月よみの宮  
古 寺 月 初瀬寺花に曇りし春はあれど紅葉の秋の月ぞさやけき

故 郷 月 月夜よみ露のふるさと訪ひ寄れば淺茅が末も玉敷の庭  
村 月 夕霧の晴れ行く空に澄みのぼる月にうまるゝ遠の一村  
里 月 花を見し峰をばよそにみ吉野の月に問はゞや里の翁を  
山 家 月 猿鳴く山かたかけし庵にもすめばすまるゝ秋の夜の月  
庵 月 月見れば千々にくだけて物ぞおもふ世を宇治山の庵ならねども  
庭 月 卯の花の雪だにしばし影留めし籬に消ゆる庭の月影  
井 月 み草をも拂へばやがて影ぞすむ飛鳥の井どの秋の夜の月  
閨 月 秋は猶しぐれぬ夜半もなき閨のひまもるものは月の桂男  
隣 月 山里の隣は遠し澄めば又こなたは曇る村雲の月  
閑 居 月 必ずと契らぬ月も訪ふものをわがまつの戸を知る友ぞなき

船 月 空の海に月の御船を漕ぎ出で、桂男も秋を知るらし  
惜 月 秋にあはゞ必ず月は澄むらめど危きものは命なりけり  
夜 擣 衣 秋の夜の露をば霜におきかへて淺茅が奥に衣打つなり  
里 擣 衣 雲かゝる外山の砧音更けて時雨を誘ふ秋篠の里  
聞 砧 身の爲に打つ衣ならば涙ちるよその枕に音な聞かせそ  
遠 砧 遠ぎぬた軒端に近く聞ゆるは隔てし霧の絶間なるらむ  
近 砧 卷きかへす音も聞えて蘆垣の間近き小屋に打つ衣かな  
秋 夜 長 家つ鳥かけの垂り尾の長き夜は八聲の後もまた寝をやする  
野 分 あらましき野分の風は招かねと尾花の袖ぞ先づ宿りなる  
葛 風 秋風は日にけに吹けど葛の葉も玉巻くほどはうらみざりけり

徑 葛 葛かつら暮れ行く秋を道の邊に引き留めんと生ひ茂るらむ  
垣 葛 くえかきの透間もとむる秋風はつくるふ葛の葉をや恨むる  
野草欲枯 おのが自し咲きぬる花の色もなしあはれ今年も野邊の霜枯  
栽 菊 葎はふ庭にも菊を移し植るば匂ひは千代もそはんとぞ思ふ  
菊 露 色々の花はあれども置く露はたゞ白菊の匂ひなりけり  
山 菊 花の香の流るゝ岸をとめてこそ山路の菊の千歳をも見ぬ  
谷 菊 とめ行かば散ること知らぬ花もあらむ細谷川に菊の香ぞする  
水 邊 菊 廣澤の池のみぎはの菊の花しづく影をば星かとぞおもふ  
尋 紅 葉 夕影に駒あゆませて尋ね見ん入日の岡にもゆる紅葉を  
初 紅 葉 もみち葉の唐紅の下染は色なき露をたのむなりけり

蔦紅葉 暮れて行く秋や大道を急ぐらむはやも色づく蔦の細道  
柞紅葉 今も猶はとそと聞けばなつかしやもみづる色はよし薄くとも  
櫨紅葉 足引の山口染のはじ紅葉やがて奥ある色を見せなむ  
山紅葉 獨行く道をも照らせ立田山燃ゆるばかりの峰のみぢ葉  
嶺紅葉 横雲の色付く見れば高鴨の峰はしぐれてもみぢしにけむ  
谷紅葉 谷かげの岩がき紅葉染めしより下行く水も秋を知るらむ  
岡紅葉 紅葉をば時雨の雨も染むといへど入日の岡の色ぞ異なる  
杜紅葉 野も山も粧ふ秋におくれじと紅葉がさねの衣手の森  
行路紅葉 もみぢ葉の下照る蔭をとめ行けば雲もしぐれて山めぐりする  
瀧紅葉 龍田姫いつ染め出して白糸の瀧を紅葉の色になしけむ

河紅葉 篝さし下る鶴船と人や見ん紅葉積み行く秋の筏士  
岸紅葉 賤の女は解き洗ひ衣さらせども影は濁らぬ岸のみぢ葉  
古寺紅葉 峰高み今日もしぐれの古寺は軒の紅葉もくち葉とやなる  
遠紅葉 一むらの紅葉の錦目にかけて時雨の雲や往きかへりする  
里紅葉 荒れぬとは誰かいふらむ今も猶紅葉色濃き深草の里  
垣紅葉 山がつの籬の蔦のかつらさへ秋には洩れぬ色を見せつゝ  
庭紅葉 大君を婿にと庭のみぢ葉は錦の帷今ぞかけたる  
簷紅葉 紅葉もて葺ける軒端は山風の拂はゞ時雨漏りもこそせめ  
松間紅葉 高砂の松にならばゞ下もみぢ嵐はよそに千代もこそへめ  
竹間紅葉 千代と呼ぶ竹原山も秋ゆけば色かへる手の枝かはしつゝ



紅葉増雨

色なしと見しは僻目かしぐるれば千入に染まる木々の紅葉

紅葉映日

下蔭は夜の錦となげくらむ夕日輝く峰のもみぢ葉

紅葉移水

水にすむかへる手ならぬもみぢ葉も色に流るゝ井手の玉川

紅葉如錦

唐錦大和錦のへだてなく染むるは秋の梢なりけり

暮秋風

いたづらに吹くと思ひし飛鳥風秋をかへしの音の淋しさ

暮秋雲

村雲のとばりかゝげて秋ぞ逝くかへしの風は知らぬ夕か

暮秋露

消えかへり物思ふらし暮れて行く秋の形見の野邊の白露

暮秋雨

いつも降る雨とはかねて知りながら袖にひまなき秋の暮方

暮秋霜

置く露も秋も深くやなりぬらむ鐘牙えわたる曉の空

九月盡夕

入相の鐘に秋をばとどめても尾花が袖の露ぞかわかぬ

九月盡夜

ゆくといへば必ず道や辿るらむまづてらしつゝ秋暮はまし

九月盡曉

逝く秋も龍田越にやかゝるらむ夜もさしぐしの曉の空

冬の歌

初冬曉

うきものとかねて知れども露ぞ置く秋に別れし曉の袖

初冬期

今朝はとて別れも行くか昨日見し秋の夕の山の端の雲

初時雨

ふらば降れ外山の里の初時雨染めのこしたる梢尋ねて

山時雨

七重八重かさなる山の初時雨いづれのをくか降り残すべき

嶺時雨

昨日見し秋の夕の峰の雲今朝はしぐれに立ちかはるらむ

谷時雨

さらぬだに日影程なき谷蔭に昨日も今日も降る時雨かな

杜時雨

夕時雨今は往き交ふ人もなしあはでの森の名こそしるけれ

關時雨

守る人も絶えぬる關と知りぬらむ名のりもあへず行く時雨哉

野時雨

霜の花さくと見し間に時雨来て元の枯生にもどる野邊かな

川時雨

時雨降る六田の淀の柳原春はみどりに染めよとぞ思ふ

里時雨

夕日さす向ひの里を目にかけて袖笠かざす村時雨かな

閨時雨

音立てし時雨は早く過ぎぬるをあやしや聞に降る涙かな

曉落葉

有明の月の桂や散りぬらむ木の葉ひまなき庭の淺茅生

朝落葉

朝霜の上に木の葉の散り敷くは夜の間にあらぬ印なりけり

夕落葉

おのが自し埒に急ぐ村鳥も落葉にまがふ夕ぐれの空

落葉隨風

色もなき風の姿を見せんとや紅葉吹きおろす峰の木枯

落葉混雨

村時雨いつか紅葉に降りかへて軒の玉水音絶えにけり

山落葉

木枯の風に木の葉の雲晴れて小倉の山は名のみなりけり

谷落葉

谷蔭と言ひなくだしそもみぢ葉の錦散り敷く冬は來にけり

路落葉

道の邊の柳の落葉散り敷きて今日は清水の跡だにもなし

橋落葉

風の風は紅葉をさそひ來て錦をわたす谷のかけはし

庭落葉

雪の山つくりし庭の古を嵐の後の木の葉にぞ見る

野霜

枯れ果てし野邊の千種も時來れば再び匂ふ霜の初花

田霜

むら鳥の落穂尋ぬる小山田の畔をば残せ今朝の初霜

庭霜

夕月の入りぬる後も白妙に霜こそむすべ庭の眞砂地

草霜

駒だにもすすめすなりぬ大荒木の霜をいたゞく杜の老草

篠霜

風そよぐ音さへ絶えて小ざゝ原霜置き渡す明暮の空

谷寒

谷の戸をあけても見ばや今も猶霜の花咲く千草百草

岡寒草 旅衣ゆきゝの岡と聞きぬるを人目も草もかるゝ頃かな  
野寒草 百濟野の萩は古枝も残せとも跡だに見えぬ雪の下草  
原寒草 紫の花のゆかりをたづねても皆冬枯の武藏野の原  
庭寒草 蔽ひたる尾花が袖もうら枯れて霜を待つ間の庭の村草  
池寒蘆 津の國のこやの池水氷るて濁るれば枯るゝ岸のむら蘆  
江寒蘆 津の國の難波の蘆も霜枯れて風かしましき冬は來にけり  
湊寒蘆 枯れ立てる蘆間を分くる聲すなり湊へかへる海士の釣船  
谷氷 初花とうち出ん波も氷るて水に音なき冬の谷川  
瀧氷 初氷むすぶとすれど程もなく朝日にとくる瀧の白糸  
湖氷 今宵もや諏訪の湖氷るらむしまきの奥に狐なくなり

田氷 住捨てし小田の假庵の苫あれて垂氷ひまなくなりまさるなり  
笈氷 落葉して淀むと見えし山里の笈は今や氷り果つらむ  
冬寒月 白露は月より置くと思ひしを霜に又見る有明の影  
寒月牙 鉾杉の木の高く月牙えて更け渡る夜のすさまじきかな  
曉千鳥 關守の又寝の夢やさそふらむ須磨の千鳥の曉の聲  
夜千鳥 風荒く波の音高くさ夜更けて友なし千鳥聲あはれなり  
川千鳥 夜船こぐ淀の川べを往きかへり何を千鳥の急くなるらむ  
浦千鳥 和歌の浦や千鳥の跡もおのづから心ありてのすさびなるらむ  
濱千鳥 更くる夜に聲も高しの濱千鳥友まとはして鳴くにやあるらむ  
池水鳥 廣澤の池は名のみ氷ぬて遊ぶひまなきをしの村鳥

川水鳥 生田川浮寝の床の水鳥は今もはかなき夢や見るらむ  
 夜網代 大かたの世をう治人は氷る夜も網代の床に身を碎くらむ  
 網代寒 月冴えて風寒ければ網代人ひをのよるをや待ちに待つらむ  
 竹 霰 窓近き一叢竹に音立てゝ早くもすぐる玉あられかな  
 篠 霰 玉ざゝに降るや霰の音たてゝ積れば拂ふ夕嵐かな  
 柏 霰 音立てゝ一むら過ぐる霰をも通さぬ森の檜の葉柏  
 屋上霰 今は世にとはれぬ宿と歎きしを軒端を叩く霰嬉しも  
 寝覺霰 庭鳥の八聲の外にうれしくも老の寝覺をとふ霰かな  
 初雪 今よりは繼ぎて降らなむ初雪の庭面白き朝景色かな  
 山雪 花は散り紅葉は過ぎて今はたゞ吉野龍田も雪の白妙

嶺雪 大空にひとむら見ゆる白雪は富士の高嶺の雪の曙  
 谷雪 行き通ふ人しあらねば降る雪に跡だに見えぬ谷の下道  
 柚雪 宮木ひく聲さへ絶えて此頃は降積む雪をみをの柚山  
 杜雪 紅葉せし昨日の夜の色もなし雪白妙の木枯の森  
 野雪 降る雪に道も埋れて武藏野はいよゝ果なき夕わびしも  
 關雪 降る雪に今は行き交ふ人もなし不破の中山關はなけれど  
 川雪 飛鳥川今日はみ雪にとち果てぬあすか春べの浪の初花  
 湖雪 眞野のうらや風の尾花と見るばかり散り來る雪の面白きかな  
 浦雪 まだ雪もあさかの浦の蜚人は道踏み分けて玉藻刈るらむ  
 濱雪 秋に見し色こそなけれ降る雪を綿にかへたる喜久の長濱

島 雪  
田 雪  
都 雪  
禁 中 雪  
社 頭 雪  
古 寺 雪  
故 郷 雪  
里 雪  
閑 居 雪  
松 雪

にはをよみ松の木間より見渡せば雪もてつくる淡路島山  
年ありと田伏の庵に降り積る雪の貢のゆたかなるかな  
草も木もみながら花の都とは降り積む雪に見え渡るかな  
降る雪に御階の櫻花咲きてまだきに春の色を見るかな  
住の江のふりぬる宮と今ぞ知る雪白妙の岸の姫松  
高野山うき世の塵は拂へども猶こそ積れ雪のふる寺  
御吉野のふりぬる里と人はいへど今も花咲く雪の夕暮  
つま木こる道さへ絶えて大原の雪の里人冬ごもるらむ  
降り積る籬の雪を拂ひ來て木の芽に夜ぞ静けかりける  
よそ目にはあたゝかげにも見ゆるかな小松が上の雪の着せ綿

竹 雪  
杉 雪  
檜 雪  
狩 場 雪  
夕 鷹 狩  
野 鷹 狩  
炭 竈 煙  
遠 炭 竈  
爐 火  
神 樂

かゝれとは降らぬものゆゑなよ竹の雪に靡くも操なりけり  
三輪の山しるしの杉もわかぬまでかきくらし降る雪の夕暮  
初瀬山檜原も雪のあけぼのはみなから花の梢のみして  
狩り暮らす交野のみ野の心地して雪吹きし捲く夕をかしも  
はしたかの草とる鈴をしるべにて夕暮おそく歸る狩人  
鷹すゑていざや訪はまし昨日まで花にたはれし野邊の朝を  
賤の男が世渡る業の一筋に立つる煙や小野の炭がま  
降る雪にいや遠ざかる炭がまの煙ぞ細きたつきなりける  
寒さにはよし堪へすとも楮の火に花咲く枝はよきよとぞ思ふ  
宮つこよみ火しろくたけ小夜神樂あかき心は神もめづらむ

佛名

法の師に被けし綿はのこれども雪とともにや罪はきゆるむ

年内早梅

浪速津に花催ひして春をまつ梅の一枝たのもしきかな

年欲暮

玉鉾の道ゆく人の松の火も残り少き年にもあるかな

夜歳暮

惜しと思ふ年の名残も空薫の煙のすゑと夜は更けにけり

歳暮

ゆづる葉を折り來る賤に事問へば山の奥にも年は残らず

路歳暮

八衢に出でてや人に問ひてましいづこを暖かば年は留ると

川歳暮

明け暮らし今年も今日となりけりゆく川水に淀瀬なければ

歳暮松

初春の子の日も待たで門毎に松引き植うる年の暮かな

山家歳暮

山ぎとは年のいそぎもなかりけり自らなる賤が門松

閑居歳暮

嬉しくも春の隣となりけり軒を並ぶる庵はなけれど

老後歳暮

老の浪今年も越えんあらましは偽ならぬ末の松山

惜歳暮

逝く年を雄島の海士の袖を見よ鹽たれぬ日も乾きやはする

戀の歌

寄天戀

大空に並べん羽はなけれども袖を重ねる契うれしき

寄日戀

中々に暮るゝ日影はたのもしき今宵逢はんの契ある身は

寄月戀

暮れなばと契り置きつるかね言も片割れ月の影は頼まず

寄星戀

棚機にたえぬ契は習はめど年にひと夜と聞くがわびしさ

寄風戀

わが思ふ方より通ふ風もがなおのづからなる人の玉章

寄雲戀

いつしかも雲の通路吹きとちてそよとばかりの音づれもなし

寄煙戀

とはに立つ淺間のねろの夕煙わが胸の火も消ゆる間ぞなき

寄霞戀

來ぬ人を待つも甲斐なし玉銚の道は霞にまがひはてつゝ



寄霧戀 晴れやらぬ胸のさ霧も妻ごめに八重垣作る時をこそ待て  
 寄露戀 手枕に貸しつる袖も今はたゞ果敢なの露の置き處なる  
 寄雨戀 偽のあるを頼みに待ちて見ん身を知る雨とかねて知れども  
 寄霜戀 契り置きし人の心も霜枯れて末野の草となるぞ果敢なき  
 寄霰戀 君は來す今宵ばかりと待ちもせぬ霰は軒に音たつれども  
 寄雪戀 我が駒の行き惱めりの偽も降らぬ今宵にあらはれにけり  
 寄稻妻戀 たまさかに通ふとすれど稻妻の名こそ恨の始なりけれ  
 寄曉戀 曉のあくるも知らず有りなまし巖の中に契らましかば  
 寄朝戀 誰が爲にまよ引つくる朝顔と思へば露もねたましきかな  
 寄晝戀 袖に置く露はちる間もなかりけり草葉の上はさもあらばあれ

寄夕戀 暮るゝをも待たで契りし人しもや秋は夕といひ始めけむ  
 寄夜戀 岩橋の夜の契を祈る身に中絶えんとは思ひかけきや  
 寄山戀 暮るゝとも猶こそ戀ひめ戀の山くしの倒もありとし聞けば  
 寄峰戀 わが思ふ心のちりも積りては高間の峰といづれまされり  
 寄谷戀 年をふる谷の戸かげの埋れ水人に知られぬ戀もするかな  
 寄岡戀 岡の名の忍ぶることも知りながら忍ぶに餘る袖の露かな  
 寄杣戀 妹待つと我がたつ杣の嘆きをばとく切り盡せ朽ち果てぬ間に  
 寄杜戀 いくへにも物をこそ思へ信田なる楠のさ枝も數たらぬまで  
 寄野戀 武藏野はいつか限も見るべきをわが戀ふらくの果ぞ知られぬ  
 寄原戀 若草の妻や籠るとまぎ行けばまだ二葉なる春日野の原

寄 關 戀

いつしかもなこそその關は据ゑにけん戀故にこそ名をも厭はめ

寄 徑 戀

玉葛くるしきものと知りつゝも今日分け初むる戀の初瀬路

寄 橋 戀

神もさぞ明くるをうしと歎きけむわが戀路にも久米の岩橋

寄 水 戀

蜘蛛手にも水はせかまし右左戀しき人のおほき世なれば

寄 池 戀

根尊ねたなと我れなりにけり斑鳩いぶらやよるかの池のよるべ知らねば

寄 沼 戀

東路の伊香保の沼のいかでかくつれなき人に戀ひ渡る身ぞ

寄 江 戀

忘貝ありとは聞けど三島江や見し人いかでまがへゆくべき

寄 瀧 戀

音づれも絶えて久しくなりぬれば袖の瀧つ瀬しがらみぞなき

寄 川 戀

淵は瀬とかはる習の飛鳥川あすの契をいかでたのまむ

寄 淵 戀

みづち住む淵といふとも戀人のありとし聞かば尋ねても見む

寄 瀬 戀

戀ゆるに苦しき瀬をも渡るなりいつか逢瀬もあらんものかと

寄 湊 戀

百足らす八十の港もあるものをわが戀ふらくの寄るべなきかな

寄 海 戀

わが戀は何にくらべん底知らぬ千尋の海も浅しとおもへば

寄 浦 戀

須磨の海士の袖ならねども五月雨に鹽垂れまざる戀もするかな

寄 濱 戀

かくばかり戀ふるも知らでうと濱の疎かる人に身を盡すかな

寄 磯 戀

風さわぐありその波の立ち居にも忘るゝ間なき人のおもかけ

寄 渚 戀

いかにせん逢ふ夜なきさの捨小舟よるとはすれどつれなかりけり

寄 崎 戀

うき人を松のひと木と歎くかな辛崎ならぬ閨の夜床に

寄 島 戀

こひ／＼てこぎ渡りつるあま船のよりしは今宵浦のはつ島

寄 瀉 戀

なるみ瀉ならぬ戀路に幾年か身をつくしたる今のくやしき

寄泊戀

梶をたえし船ならなくに徒にとまり定めぬ戀もするかな

寄渡戀

年經ともいつかなるとの沖ならばかくまで袖に浪はかけしを

寄岸戀

わが思ふ人をみむろの岸ならばよし濁りても渡りてを見む

寄石戀

だじろがぬ千引の石と知らずして身を盡したる我ぞはかなき

寄巖戀

動きなき巖に似よと願ひしは逢ひ見し後の心なりしを

寄砂戀

往きかへり踏み鳴せともわが戀の數にとるべき眞砂地はなし

寄田戀

秋の田の假初ならぬ手枕をいたづらいねとかいふべき

寄都戀

ならの葉の名に負ふ都年へてふりぬる戀となるぞ悔しき

寄禁中戀

わが戀は櫻たちはな相生の蔭をならべん時をこそ待て

寄社頭戀

岩が根のこゝしくたてし宮柱動かぬまでも戀ひ渡らまし

寄寺戀

待ち／＼て寺勤行の鐘の音を今はしゝまのとちめとぞ聞く

寄里戀

我が思ふ妹と伏見の里ならばあだなる夢も嬉しからまし

寄庵戀

うき人をまつの庵は名のみにてくものすがぎのくる人もなし

寄門戀

門さゝで今宵も待たんさゝがにの蜘蛛の振舞ともかくにも

寄戸戀

若草の妻戸と聞くも嬉しきにあげて待つ夜もなかつれなき

寄垣戀

薄垣招く夕もありなめとさてはへだつる名をいかにせむ

寄籬戀

天つ風雲のまかきははらへども處女のすがた見るよしぞなき

寄庭戀

きぬ／＼の袖の白露落ちそひて眞砂の庭も秋を知るらむ

寄井戀

浅しとは誰かいふらん思ふ子に逢はではなとか忘れ井の水

寄屋戀

枕づく妻屋にかよふ月影も夜な／＼袖になれくるものを

寄柱戀

卷柱まきねし妹を戀ふればか夜な〜夢に見えつゝもとな

寄軒戀

僞とかねて知れども軒ばなる蜘蛛のふるまひ憎くしもあらず

寄窓戀

待つ人の袖かと聞けば曉の窓うつ聲は落葉なりけり

寄床戀

我が如や浮寝の鳥も打ちとけてぬる夜はあらし氷る夜床に

寄閨戀

月夜には來ぬ人待たるとばかりに閨の妻戸をさすひまぞなき

寄隣戀

中垣のとなりかくなり戀ひわびん身は徒になりはてぬとも

寄簾戀

なか〜に野分の風も憎からず小簾のすげきの花を見るにも

寄初草戀

春日野の雪間に萌ゆるさいたづま見し夕ぐれや戀の初草

寄忍草戀

陸奥の忍ぶにあまる白露や獨ぬる夜の袖くたすらむ

寄忘草戀

忘草生ひんものともおもほえず朝に日にけに戀は茂れど

寄思草戀

思草生ふてふ野邊の初尾花かりそめならぬ戀もしてまし

寄下草戀

いひやせん言はでや止まむ我が中はまた燃え初めぬ戀の下草

寄葵戀

空たきは匂ひ來れども玉だれにかけし葵のたのみがたさよ

寄月草戀

月草はうつろふ色と聞くからに閨のつまには植ゑしとぞ思ふ

寄菖蒲戀

菖蒲草袖にかけても契らまし引く手あまたになり行かぬ間に

寄薦戀

刈薦のおもひ亂るゝつかね緒は枕並べし夜半の下紐

寄菅戀

かにかくに逢はではた〜にやま菅のねもごろ人を思ひ初めては

寄葛戀

人言は眞葛が原にさわぐとも秋風た〜ぬほどはちぎらむ

寄萱戀

刈萱はたへぬ思ひにみだれあひて踏み通ふべき道だにもなし

寄淺茅戀

契りきな庭の淺茅の末終に色かはり行く秋を見せじと

寄蓬戀

いつしかと枯れ行く庭の蓬には心に染まぬ露もこそ置け

寄苔戀

苔庭かさねても猶下冷えて君を待つ間は夢もむすばす

寄芝戀

道芝の今朝しも露の深かるは誰が曉の涙なるらむ

寄蘋戀

見し夢の名残だになし浮草の根を絶えんとは思はざりしを

寄藻戀

玉藻なす靡きねし子に契り置きてよるかの池の夜を待たばや

寄沼繩戀

ねぬなはの多き此頃戀ふらくは益田の池と君に告げばや

寄海松戀

わが方に寄り来る浪の浮みるを異浦人ことらひとやいかに見るらむ

寄松戀

染めかねし時雨の雲は別れてもまつと聞くこそ猶たのみなれ

寄椿戀

つら／＼に見れども飽かぬ玉椿八千代をかけて契りおかまし

寄柳戀

柳葉の色かはらじと祈れども人の心の秋ぞつれなき

寄杉戀

幾とせかつれなき色をみわの杉何か祈りし印なるらむ

寄檜戀

玉敷の大宮つくる檜のつまで引く人あらば枕ならべむ

寄楨戀

今は世に枕かはさん人もなし楨立つ山の秋はものかは

寄椎戀

家苞に見せん子もがな落椎の實よりもろき袖の涙を

寄桂戀

我が戀は月の中なる桂男もゆきて折らんの思くるしも

寄檜戀

なら柴のならぬ戀路を分け初めて今は宿らん蔭だにもなし

寄柏戀

笛竹の音には立てねど人目多み浮名はいつかまりの柏木

寄桐戀

世の中の戀する人に桐壺の一葉の秋の色を見せばや

寄柞戀

戀ひ渡る人には見せし柞原思ひの色のうすきもみちを

寄櫨戀

足引の外山のはじの下紅葉色うすかれとちぎりやはせし

寄 楸 戀

夜がれしも濱のひき木となりぬれば床の塵さへ數つもりつゝ

寄常磐木戀

かはらじと契る心の常盤木に秋てふ風の吹かんものかは

寄 杣 木 戀

今は世に朽木の杣となりぬれば引く人もなき身をいかにせむ

寄 宿 木 戀

やどり木のかり初ならぬ契とは根ざして後ぞ思ひ知りぬる

寄 鹽 木 戀

蛸のつむ小舟の鹽木流れての末は戀路に燃えわたるらん

寄 朽 木 戀

花咲かぬ朽木とかつは知りながら渡しても見ん夢の浮橋

寄 埋 木 戀

埋木となりぬる後もあふくまの川の名をこそ猶頼むなれ

寄 鶯 戀

鶯のなみだの氷柱とけん日を待つも甲斐なき我が戀路かな

寄 雉 戀

東雲の明くるあしたに鳴く雉子もわがきぬくの思なるらむ

寄 子 規 戀

ほととぎす汝も人目を忍び音は苦しきものとかねて知るらむ

寄 水 雞 戀

忍妻待つとてさゝぬ金戸をばたゝくは水雞無しとこたへむ

寄 雁 戀

戀ひゝてかはす枕も雁がねのかへる春べのあるが悲しさ

寄 鶉 戀

鶉伏す露の夜床はさむくとも妹とふすまのあらばたのまむ

寄 鶉 戀

今はたゞ夜がれの數をかきつめて羽かく鳴に思ひくらべむ

寄 鶉 戀

此頃は夜がれのみかは見る事も絶えて久しき鶉の草くき

寄 千 鳥 戀

小夜更けて千鳥妻よぶ聲すなり我れも今宵は音にや泣かまし

寄 鳩 戀

家鳩のかへるを待つも久しきになぞ玉章のこたへだになき

寄 鳩 戀

忍びてもゆかましものを鳩鳥の通ひ路知らぬ身こそつられ

寄 鴛 鴦 戀

をしのごとつがひ別れぬものならば波の浮寝も厭はざらまし

寄 鴨 戀

沖つ鳥鴨つく島に二人寝は音に泣きつべき夜半はあらじを

寄 鶉 戀  
寄 鷺 戀  
寄 鵲 戀  
寄 鷹 戀  
寄 山鳥 戀  
寄 鷄 戀  
寄 鶴 戀  
寄 熊 戀  
寄 虎 戀  
寄 馬 戀

籌さし下る鶉飼の綱手繩みだれも行くか戀のしげさに  
おり立ちて浅みにあさる白鷺も深き戀路は苦しとや知る  
さはり多み今宵は宿をかさゞぎの時に迷ふ我が身つらしも  
袖枕かりちの小野をこひゆかばいつか草とるかたもあらまし  
鏡なす我がもふ妹に山鳥の尾上へだつる夜こそつらけれ  
夜深きに明けぬと告ぐる家つ鳥かけのそらねの憎くもある哉  
小夜中と更けにけらしな村田鶴の聲はすれども君ぞつれなき  
荒熊の棲むうつぼ木の中ならば人に知られぬ戀もしてまし  
戀の道虎ふす野邊にあらなくに人の口はおそろしの世や  
乗る駒も今宵ばかりと知りぬらん妹が門をば過ぎがてにする

寄 猪 戀  
寄 鹿 戀  
寄 蝶 戀  
寄 蛙 戀  
寄 螢 戀  
寄 蚕 戀  
寄 松虫 戀  
寄 鈴虫 戀  
寄 織促 戀  
寄 蜘蛛 戀

一夜だにかるもの床に枕せん妹と臥すまのよしみありやと  
待つ甲斐もあらしに更くる鹿の音を獨ぬる夜に聞くぞ苦しき  
花にぬる胡蝶に問はん戀人の姿を夢に見るよしもがと  
今はとてかへるてふ名もあはれなり我が曉に思ひ比べて  
すき影を見つゝや人も疑はん袖に包める螢ならねど  
きりくす枕に近く聲するは二つ並べぬうらみなるらむ  
松虫の聲きくたびに恨めしや我れをば待たぬ人のつらさの  
鈴虫の鳴く音ふり行く我が戀は蓬が袖の露の夕ぐれ  
はたおりめ露の夜床に聲すなり汝れも我が如妻や戀しき  
振舞も何かたのまんさゝがにの厭はるゝ身となり果てしより

寄 繭 戀

ふたごもる繭だにあるを獨寢の床のさむしろあはれとも見よ

寄 我 柄 戀

我れからと音には立てねど浮草のよるべ定めぬ戀にこそ泣け

寄 玉 戀

玉ならば磨きて手にも巻かましを袖に涙の消えをあらそふ

寄 鏡 戀

面影の鏡にとまるものならば須磨のうらみの波はかけじを

寄 匣 戀

玉匣ふた夜とだにも契らぬをのちを見よとの一言ぞよき

寄 櫛 戀

玉櫛のさしてもそれとつげねども別れても又逢坂の關

寄 蔓 戀

玉蔓まかん思ひはこもりくのはせにもいかで打ち明すべき

寄 元 結 戀

紫の初元結の長かれとちぎり置きても頼みなの世や

寄 枕 戀

いたづらに小夜の枕は並べても椎がもとをばいかにかはせむ

寄 蓆 戀

嬉しさに堪へぬ涙やこほるらん妹とぬる夜の霜のさむしろ

寄 衾 戀

あはぬ夜を重ねんものと思ひきや君と臥すまの夜半の枕に

寄 裳 戀

忘れんと思ふもはかな我妹子が赤裳裾曳き往にし姿を

寄 衣 戀

濡衣さもあらばあれ君故に立たん浮名は惜しけくもなし

寄 紐 戀

いれ紐の同じ心に戀ひ行かばみだれし中もとけすやはあらぬ

寄 帶 戀

こまうどにとられし悔はありなめど我にはとけよ夜半の下帶

寄 時 戀

嬉しとも嬉しきものは別れての後のあしたのふみの移り香

寄 繪 戀

とられ行くえみしの國は恨みねど繪がきし筆のあやに悲しき

寄 硯 戀

かきみだり硯の石の見る目さへ厭はぬ戀となりにけるかな

寄 筆 戀

横文字の筆のあやめはわかすとも寄り來し子をば豈捨てぬやも

寄 笛 戀

笛竹のひとよばかりは何かせん彌長かれとぞ願ひそめつる



寄箏戀

中の緒の絶えぬ契はかきならす我が爪琴のしらべにを知れ

寄弓戀

梓弓引きみゆるべみ試みん我れにより來ぬ心づよさを

寄箭戀

痛矢ぐしよしや立つとも厭はじと思ふや戀の習ひなるらむ

寄扇戀

取りかへし扇ばかりをたのみにて月は霞にまがへ果てぬる

寄簀戀

人目をば隠簀着て通はまし身を知る雨はよし晴れずとも

寄笠戀

夜な／＼の涙にかさず袖笠やいつの時雨と人にこたへむ

寄糸戀

白糸のいかなる色にならんともまだ言ひ初めぬ中の睦言

寄錦戀

さゝらがた錦の紐を解きさけて寝るは誰が子ぞ今一目見む

寄挿頭戀

梅さくら君がかざしとなるならば手折らるゝ身も何か厭はむ

寄手向戀

大ぬさの引く手はあれどみそぎ川淺瀬にいます神は頼まじ

寄木綿戀

祈れども神もうけすやなりぬらん動くともなき御戸のゆふしで

寄四手戀

神垣にかけし願のゆふしでの靡くを思ふ人に見せばや

寄注連戀

注連繩をむすびの神に立ちかへり我が中をもと祈り祈らむ

寄車戀

中川の宿りなれてもきぬ／＼のむかへくるまの曉ぞうき

寄船戀

蜃小舟よるべを波に捨てられていまはうらみん方しもぞなき

寄楫戀

かちのとのつばら／＼に聞かせまし波のよるひる戀ふる心を

竹帆戀

帆にあげて來る雁ならば聲も聞け思ひこめたる戀の苦しき

寄碇戀

綱手繩くるしかりしもとけゆかむこゝをよるべと下す碇に

寄苦戀

海士小舟苦もる月の影はあれど君がみ影し戀しかりけり

寄網戀

引く網のよるの契やたのむらん月をも待たで歸る蜃の子

寄 網 戀

あら駒の手綱ゆるべぬ武夫の心もなごむ戀の一筋

寄 繩 戀

さし下す鶴船の手繩くるしとは明け行く空の別れにぞ知る

寄 泛 子 戀

浦の海士の釣のいとまも波の上に浮きて漂ふ身こそつらけれ

寄 筏 戀

水馴棹見馴れてもなほ見まほしと花ゆる筏さしぞわづらふ

寄 篝 戀

九重のとのへを守る篝火の消ゆる夜もなく燃ゆる我が戀

寄 落 標 戀

難波江のみをつくしても戀ひ渡れいつかかひある浦にあはまし

寄 貝 戀

いたづらに人に心をうつせ貝あひかたし貝あるも知りつゝ

寄 斧 戀

柚人の手に古るさるゝ斧の柄の朽ちん日までも戀ひ渡らばや

寄 笠 箒 戀

花筐わすれがたみに取り添へてめならぶ子等をいつか忘れむ

寄 燈 戀

うき人を待つ夜の闇の灯火は影よわれども音づれぞなき

寄 鐘 戀

待つ夜半の心も知らで皆人を寢よとの鐘ぞ恨なりける

雑の歌

山 榊

玉串のみ門守るも香具山の神代の種の榊なるむ

嶺 椿

巨勢山の八つをの椿つらくに見る我さへも八千代經なまし

澗 榎

谷蔭に生ふる榎も高野山雲よりうへの榎の一むら

麓 柴

真柴刈る麓の里の夕煙きのふは風のやどりなりしを

柚 檜

しみ立てる檜原の柚木大宮に仕へまつらん時をこそ待て

杜 柏

常磐なる森の葉柏手折り來てきねり備ふる神の大御饗

岡 椎

夕影にうなるあげまき打群れて椎の實拾ふ岡のへの宿

濱 楸

瑞籬のひさ木は松をあえものに根ざしそめけん住吉の濱

磯	松	根あがりの松にそなれて白波も明石の磯に聲合はすなり
門	杉	のがれてもまだ世に住める印とや山かたかけて杉立てる門
窓	竹	若竹の葉末の露を窓あけて硯に受くる朝氣すゞしも
籬	草	故郷をふりはへ訪へば籬には我れを忍ぶの草も生ひけり
庭	苔	苔むしろ重ねる道を分けければこゝにも露を玉しきの庭
簷	忍草	露の世を軒のしのぶと見る程に袖にもかゝる露のみすまる
岸	忘草	忘草生ふとは聞けど西の海の神代おぼゆる住吉の岸
野	篠	今日いくか野路の篠原分けぬれと世に残るべき一ふしもなし
路	芝	路芝の露を集めて水かはん疲れて見ゆる夕かげの駒
沼	蘆	難波なるみつともいはで隠沼に角ぐむ蘆は知る人もなし

江	菅	三島江に隠れて立てる白菅も人に縫はるゝ時はありけり
河	藻	飛鳥川きのふは淵に今日は瀬に玉藻の亂れよるべなきかな
名所山		神代よりあらた／＼に降りしきて老いせぬ山は雪の富士の嶺
名所峰		不二の嶺に降り覆ふ雪は代々かけて我大君の御笠ともなれ
名所岡		遠けれど来て水葦の岡の屋に草のまくらは誰か借るらむ
名所杣		弓作る梓の杣木ますらをのやと聲かけて今やひくらむ
名所杜		名に負へる常磐の森の下草は駒もすさめぬ秋はありけり
名所野		あづき弓入野を分くる狩人は篠のをすゞき矢にや刈るらむ
名所原		君が代は磯山もとのしづ枝まで榮ゆくかげを三保の松原
名所關		蟹の行く横文字の關する置かば見なれぬ船は寄らじとぞ思ふ

名所路 小車のめぐり來る世やいかならむ荒しな果てそ千代の古路  
 名所橋 朽ち果てし長柄の橋もあらためて造り出づべき時近みかも  
 名所池 から人をよぼろに池や造らましあきらの宮の御代に習ひて  
 名所澤 鹽なはに凝りぬる國の末かけてとゞろき渡れ富士の鳴澤  
 名所沼 五月雨に淺澤沼は名のみしてあやめも分かぬ波の下草  
 名所瀧 落ちそめて幾世をふるの瀧つ瀬は黒き筋なく老いにけらしな  
 名所川 あなあはれ隅田河原に住む鳥も都こひしと鳴かぬ日はなし  
 名所海 伊勢の海やいく度そなれ來なれても又立ちかへりみつの葉柏  
 名所湊 蘆田鶴も難波に千代をよばふらん千船百船よらぬ日のなき  
 名所湖 玉くしげ箱根の湖は霧こめてむすばん水も波のうたかた

名所浦 和歌の浦や玉藻もがなとまぎ行けど底は詞のあくたのみして  
 名所濱 小夜千鳥君が八千代と鳴く聲をいざや雲井に吹上の濱  
 名所磯 こよろぎのいそがぬ旅のなぐさには磯菜や摘まん貝や拾はん  
 名所汀 思ふ事なきさに遊ぶ鳥すらも暮るれば妻をよびつぎの濱  
 名所崎 いかゞ崎いかゞと人の問ひもせば花の浪よる春を語らん  
 名所島 徒に寄る仇浪のあればこそたはれ島とは名を負はしけめ  
 名所瀉 玉くしげ明かして行かん二見瀉夜の波路はあやふからまし  
 名所泊 唐とまり唐櫓とる船寄るからに波靜なる時の間もなし  
 名所渡 歎かないかになる戸の仇浪の立ちても居ても安からぬ世を  
 名所田 武夫の腰にとりはく太刀のさや玉巻く田井や神のみとしろ

名所里	宵闇も月にまがへる卯の花に道くらからぬ小野の山里
名所市	ものゝふの矢矧の市に沓かひて急げ旅人日の暮れぬ間に
霧中山	さやかに今日こそ見つれ武夫の下げ佩く太刀の佐夜の中山
霧中峰	七重八重雲の峰を越え來れば風はだ寒し衣かせ山
霧中野	いづくにか宿りは借らん武藏野は限も見えず果も知られず
霧中原	帚木の消えしやいづこ今も猶伏屋たになき藪原の里
霧中關	旅人のはたごの馬の鈴鹿山關は古りぬる昔なりけり
霧中路	旅人の行きなやむまでかる萱の亂れてなびく道のやちまた
霧中橋	草枕むすばんほども長橋や今日分け初むる瀬田の朝霧
霧中川	旅人をとむるともなき藤川や關のこなたにありと聞けども

霧中湊	浪風のひまなく騒ぐ湊にも夜渡る月の影はとまらず
霧中海	箱館や沖のなごろの高ければ渡りわづらふ船ぞおほかる
霧中湖	箱根路やみづうみ遠く見渡せば雲分けわぶる峰の旅人
霧中浦	今日幾日草の枕は結べども飽く世も知らで三穂の浦松
霧中濱	八百日行く濱の真砂も何ならず人を戀路の遙けき思へば
霧中磯	夜ならべて月も見ましをこよろぎのいそぐ旅路はせん術もなし
霧中汀	知る人も絶えて汀にやどる夜も月はむかしの友にこそあれ
霧中島	旅にして都島ねは遠けれと春よ秋よの雁のゆきかひ
霧中瀉	から衣ひも夕ぐれに鳴海瀉千鳥も宿を借れよとぞ鳴く
霧中渡	かげもなき佐野の渡に行き暮れて月を待つ間の思ひ苦しも

躑中泊

唐衣かさねて幾夜明石瀉こゝをとまりと月も照るらむ

躑中里

夕餉たく里の煙を目にかけてはたこの馬に鞭おほすらむ

山家春

梅も咲け鶯も鳴け山里の霞につゝむ夕ぐれの庭

山家夏

花散りて人も梢の山里は青葉隠れに世をやつくさむ

山家秋

鹿の音も鳴子も秋は聞きわびぬ猶世の外の山里もがな

山家冬

今よりは時雨に交る雪みぞれ空定めなき山もとの庵

山家曉

鳥の音も聞えぬ山に住めば又あかつき告ぐるむさゝびの聲

山家朝

朝霧の晴れぬ山路を柴刈りに上る翁もあはれ世の中

山家夕

山川に解き洗ひ衣ふり捨てゝ夕げにかへる姥が一つ家

山家夜

ゆふづゝの影にはあらぬ灯火にそれと知らるゝ夜半の山里

山家風

うき世をばのがれし庵も春は花秋は紅葉に山おろしの風

山家雲

山里と人はいへどもをりゝは雲の上なる心地こそすれ

山家煙

朝夕の細き煙にかへんとや軒端の山に立つる炭がま

山家雨

雨そゞぐ外山の里の庵べは笠宿りにと來る人もなし

山家路

しかすがに道こそ絶えね柴の庵峰の落椎谷のさゝ栗

山家水

仙人のすめるあたりのいさら井は千代を數ふる手に結ばまし

山家庵

尾花もて山の下庵葺けばこそ招かぬ風もとはに吹くなれ

山家草

山里の折かけ垣にむす草はみながらに世をしのおなりけり

山家苔

道しあれば深山の奥の庵をも苔ふみ分けて人もこそ訪へ

山家木

うつば木に今や隠れん山里もうき世の塵をのがれがたさに

山家鳥

人訪はぬみ山がぐれの庵にも馴るれば馴れてかへる家鳩

山家虫

おぼつかない人まつ虫の聲はあれど浮世にさかる山もとの庵

田家春

穂薄をかりほの庵もあれぬ間に又うちかへす春の小山田

田家夏

ますらをがかへる夕をまつ妻は田ぶせの庵に蚊遣たつらむ

田家秋

雁も鳴け小鹿もどよめわせおきてたり穂の秋の賤が門田に

田家冬

かし鳥の賤が門田の夕かげに落穂たづぬる冬は來にけり

田家風

湊田に穂波を寄する夕風は貢の船出今よりや待つ

田家雲

植る果てゝ歸るふもと田雲おりて家路隔つる五月雨の頃

田家煙

賤が守る田中の井戸の水煙ほのみえ初めて秋を待つらむ

田家雨

村時雨ふるの山田のくづれ庵笠やどりには頼むべきかな

田家鳥

群雀門田の落穂くひもちて年ある秋を千代と鳴くなり

田家虫

植るしとき雨にかりたる簀虫の聲をたづぬる小田の夕暮

春夜夢

曉も知らでうま寝に春の夜は結びも果てぬ夢の手枕

夏夜夢

夏の夜は難波のみつといふ程の夢も結はず曉の鐘

秋夜夢

叢の虫を聞き寝の枕には夢の中にも露やおくらむ

冬夜夢

枯れ渡る草葉に霜は結べども結びかねたる冬の夜の夢

曉夢

葛城の峰ならねども曉の鐘にとだゆる夢の浮橋

短夢

ぬは玉の夢結ぶ夜も波あれて難波の蘆のふしの短さ

驚夢

啼く聲に寢覺めし夢の名残には門田の鹿をおどろかすかな

山眺望

とはに立つ不二の高嶺の雪煙むかしを今も見る心地して



野眺望 見飽かねば今宵はこゝに宿借らん花野の錦露のさ蓆  
海眺望 花管提げ行く子らは鹽さゝるに小貝やひろふ海松や尋ぬる  
雨中懷舊 昔懐ふ草の庵の寢覺には降らぬ夜もなき袖の村雨  
深夜懷舊 繰り返へす昔語に老の世も今宵もいたく更けにけるかな  
庵懷舊 いにしへを忍ぶの庵は跡もなしたゞとくくの清水のみして  
閑居懷舊 今も猶消えぬ思ひをいかにせむ忍ぶ昔の軒のともしび  
夢中懷舊 今も猶世にあらましと思ふ人を夢見し後ぞ更に戀しき  
寢覺懷舊 曉の寢覺をさそふ鐘の音も昔は知らでやはら手枕  
懷舊淚 目にも見ぬ昔語をいかでかく涙は知るや袖の露けき  
獨懷舊 今は世に昔語らん友もなしあはれあなうの老の寢覺や

懷舊非一 古を泣きみ笑ひみ語る夜は更けぬに鶏の鳴くかとぞ聞く  
寄日述懷 老いぬれば明日の日影も頼まねば夕の空のいと戀しき  
寄月述懷 雲風も收まれる世は月影の入るさの山も何かねがはむ  
寄星述懷 大空に浮べる星も我が如や寄るべ定めぬ世をば過ぐらむ  
寄風述懷 世の塵を松の嵐に拂はせて住まば甲斐ある山の下庵  
寄雲述懷 日のみかげ月のみかげもおほふなり世の浮雲は人の上にも  
寄煙述懷 富士の嶺はさもあらばあれ朝夕の煙は絶えぬ世を願ふかな  
寄露述懷 壁に生ふるいつまで草に宿りても千歳は知らじ露の世の中  
寄雨述懷 今日幾日晴間も見えぬ五月雨のふるざれし身をいかにしてまし  
寄霜述懷 咲き匂ふ花をよすがの白露も今日はあだなる野邊の夕霜

寄雪述懷

養はゞ人もいくらの年かへん富士のみ雪の消ぬを見るにも

寄山述懷

高山も塵よりなるといふめれば世の營も心せよ人

寄關述懷

關するてな來そといはゞ遁れ住む山の峽には憂目見えじな

寄道述懷

治れる世のたまものに尋ね見ん深山の奥も道はありやと

寄橋述懷

我れひとり古りぬる物と歎かな橋は長柄となりし世なれば

寄沼述懷

よしあしの繁が中の隱沼のいつあらはれて世には知られむ

寄江述懷

みさび江に夜るゝ宿る月影も心ならずや澄み渡るらむ

寄川述懷

君が代にあふくま川の鮎すらもさびて落行く秋はのがれず

寄瀨述懷

筆の海硯の海にすなどりて波の藻屑も搔き集めばや

寄浦述懷

いくとせか和歌の浦路を行きかへり尋ねしかひの白玉もなし

伊勢

家つ鳥かけろとうたふ聲聞けば岩戸開けしむかしをぞ思ふ

岩清水

世の憂さを洗ひてこゝに岩清水皇御門を守るがかしこさ

加茂

加茂川や波の白ゆふかけまくもかしこけれども世を祈るかな

松尾

治れる世をまつの尾の神ならば榮ゆく蔭を早も見せなむ

平野

高き屋にみそなはしけん夕煙太しき立てと宮造りけむ

稻荷

今年より猶こそ頼め稻荷山世のとみ草の秋のさかえを

春日

春日山耳ふりたてゝさを鹿は夜毎に霜の聲を聞くらむ

三輪

人皆の願ふしるしを三輪の杉下葉榮ゆる御代にもあるかな

布留

幾歳かふるの社のみしめ繩猶ゆくすゑや千ひろなるらむ

大原野

大原や小鹽の松を見ても知れ君が千歳はいろもかはらじ

吉田  
住吉  
日吉  
梅宮  
祇園  
北野  
貴船  
出雲  
玉津島  
熊野

長秋の千秋の末もふりいでよかくらの岡の鈴虫のこゑ  
ことの葉の末守るとは住吉の松の緑の榮にぞ知る  
あたら世の平の都うごかめや七の社の神し守れば  
梅の宮いのらば御代は色に香に花の春べをとほにこそ見め  
みてぐらに櫻かざして千早振神の園生にむるゝ諸人  
宮柱こゝにたてよと一夜松岩根こゝしく生ひ初めにけむ  
貴船川流れゆく世も守るらん歩みを運ぶ人ぞおほかる  
かみごとは大國主のもち分けて今も知らせるおほにな思ひそ  
かきつめし波の藻屑の上までも光をそへよ玉津島姫  
花あらば花もて祭れ御熊野の神の御前の豊のみてぐら

如是相  
如是性  
如是體  
如是力  
如是作  
如是因  
如是緣  
如是果  
如是報  
如是本末  
究竟等

朝鏡とればより來る佛をかりそめと見る人のおろかさ  
宵の間のしぐれの雲の晴れゆけば光は空に有明の月  
春秋の姿は物のうへのみか浮き沈みある人の世の中  
力をも入れず動かす天地はたゞ敷島の道の誠か  
つみとりの種はおろさぬ山田にもさはる嵐はある世なりけり  
しかりとて種をば誰かおろしけん岩根の松も昔たづねば  
花あらばたゞには過ぎじ草の庵あるじなしとて春ならぬかは  
誰が袖の匂ひをいまも傳へけん過ぎゆく風にかをる橘  
うき世とも悟らで過ぐる我が上の後の報よいかゞあるべき  
もみぢ葉を染むる時雨とみるほどにくたすも同じ時雨なりけり

地獄 佛さへ知らぬ境のそらがたり沈み果つべき種と知らずや  
 手にもすぶ水の上にも陽炎のもゆるものとは人は知らずや  
 餓鬼界 千歳ふる鶴にもいかで身をかへん人は人にてあるが嬉しき  
 畜生界 八島がた昔をとへば投ぐる矢に向ふ命や波のうたかた  
 修羅界 生れ得し甲斐こそなけれ世の中をそむかまほしく思ふ迷は  
 人界 契ありて天津乙女のふる袖ををり／＼見する雲の立舞  
 天界 今も猶鷺の山風吹き落ちて紅葉を誘ふ聲聞ゆなり  
 聲聞界 散ればとて花は又來ん春もあらん果敢な夢や人の世の中  
 緣覺界 世の人を今渡さんと船をさの思ふ心も佛ならずや  
 菩薩界 罪とがも今は忘れて冬の田に立てるそほづも佛なりけり  
 佛界

二 乘 天となりつちと分かれて恵むなり御山の木々も野邊の小草も  
 寄天祝 蘆かびのもえのぼりたる古をおもへばもへば幾久く  
 寄日祝 千萬の年はふれども天津日の恵にもるゝ末の世ぞなき  
 寄月祝 大君の光も何かおとるべき天てる月の影にくらべて  
 寄星祝 限なき御空の星にくらべてんいくひささなる君が代の數  
 寄雨祝 五月雨も時雨も時をたがへねば年ある秋と世を祝ふかな  
 寄風祝 高松の枝に争ふ風もなし八島の波もをさまれる世は  
 寄國祝 鹽なはのとゞまるかぎり貢船つらなべて來る國は此國  
 寄郡祝 天かける鶴の郡のわせおくてこれや老いせぬ藥なるらむ  
 寄都祝 春は雨秋はもみちの色添へて散る事知らぬ都なりけり

寄道祝

道といふ道はあれども玉ちはふ我が神道にます道あらめや

寄水祝

淵は瀬とよしかはるとも飛鳥川たえぬ流は御代ととこしへ

寄巖祝

さざれ石の千引となりて苔のむす末の代かけて君ぞさかえむ

寄苔祝

沖の石に齡をちぎる苔衣天津をとめの袖になづとも

寄竹祝

九重の庭の吳竹葉をしげみ君が千とせにあえんとやする

寄松祝

軒近く松をば植ゑん君が代もわが代も千代と呼ぶ聲のする

寄神祝

君が代の榮を祈る真神の種をつたふる天の香具山

寄椿祝

巨勢山のつら／＼椿君が代を千代萬代のかげにともなへ

寄杉祝

君が代にくらべんものは神代より色をもかへぬ三輪のあや杉

寄鶴祝

わが齡君にゆづると九重の雲の上まで聞えあげてよ

寄龜祝

うき時は六をかくして山川に遊べる龜や萬代は經む

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the left page.

Handwritten text, possibly a signature or a specific marker, located below the main block of text on the left page.

Handwritten text, possibly a signature or a specific marker, located on the right page.

あはれなる御歌の御覧  
御覧の御歌の御覧  
御覧の御歌の御覧

五首

御覧の御歌の御覧  
御覧の御歌の御覧  
御覧の御歌の御覧

千首の歌題を列ねて詠み初められしは中院の大納言爲家の卿を  
もて始めとやいふべからむ。そは若き御時に此道におこたりの御  
心ましましければある時慈鎮和尚に世をや捨て侍らんなど語られ  
しを、まだ是非の見ゆべき程にもあらず猶御心を起して學び給へ  
と諭されしをうべなひてたゞ五日の程に千歌の數を列ねられて父  
の卿に見せ給へりしかば、立春の歌十首を見て此題などかくもよ  
み出で給へりしかとて末まで見終りて家隆の卿にも見せらるべき  
由申されしとぞ。しかりしより後家の風をも吹き傳へ道の宗匠と  
も仰がれしはみな此上人の賜物なりとかあるふみに見えたり。其  
後吉野の奥にて年の名を天授といひし頃内東宮の思召したせ給  
ひて其頃伺候の人々に詠ませ給ふよし宗良親王の御記に見ゆれど  
師兼卿の千首のみかつゝ世に傳はり外の歌はいかになりしか知  
られず。つぎ／＼に詠み出でられ給ひしは此親王さては中納言長  
親卿大納言爲尹卿中納言雅縁卿なり。此よたりに文明の頃の人々

同じ題にて詠み置かれし千歌を加へて類聚なし千首部類と名づけし小冊は小澤の蘆庵翁が我がため人のためにとて梓にちりばめられしものなりとぞ。今は此板木もなしや。摺巻も世に多からぬを我が子の忠禮浪華の營に月日を重ねたりし時とあるふみ屋にて見出でたりきとて役果て、後携へかへりぬ。おのれ今は仕をもかへし暇ある程なれば暮れ行く年の日數も忘れて埋火のもとにまだ來ぬ春の程よりいと長閑なる心に任せ先づ折に觸れたる冬の題百首はとみに詠み終り戀の歌もや、半に過ぐる頃年も變りぬ。花がめにさしたる梅も綻びいで鶯誘ふ春風もやなど思ひ出でられて又春の題をよみ初め夜となく晝となくながめ行く程に如月の十日の程に千歌の數にはなりぬ。先にいへる人たちの後には寛政の頃垂雲軒の澄月とて都に許されたりし法師の千首櫻木にちりばめ世に傳へたるのみ。なほもあるべけれどおのれは知らずかし。

おのれが千歌よ。和歌の浦わの波のうろくづ曳く網の目にとま

るべくもあらねど七十ちかく老の波さへ打ち寄せていよ、癡れ行く心のおろも數添はり行くまゝにかくは書つめたるになむ。昔未だ三十ちにも足らざりし程より螢澤の屋の翁岡の正武ぬしに物とひて御國の道の教をもかつ、踏み初めしよりかき數ふれば四十とせあまりこよろぎのいそちもちかくなりぬるをかくも手づなる歌のみよみ出しよ。いと、たい、しけれどいかゞはせん。此二卷を千曳の巖と名づけしはこもそのかみよりの心知り栗原の信充翁とて唐大和の博士おはして我が老の世のかくれが蝸牛の家なすばかりをいとなみ出でしなど聞えやりし文のかへしに、そは長明法師の方丈室に通ひたらむなどありて千曳庵の三字を作り出で贈られしかばやがて額といへるものに調じなして懸けたり。こも千首のゆかりと思ひよりて卷の名にはつけぬ。

慶應三丁卯彌生ばかり

源忠香入道菊叟 みづからしるす



いふはたしむるはたしむるはたしむる  
結國之志はたしむるはたしむる  
あつたはたしむるはたしむるはたしむる  
久保川はたしむるはたしむるはたしむる  
信く國はたしむるはたしむるはたしむる

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on the left page of an open book. The words are difficult to decipher due to the cursive style but appear to include:

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on the left page of an open book. The words are difficult to decipher due to the cursive style but appear to include:

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on the right page of an open book. The words are difficult to decipher due to the cursive style but appear to include:

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on the right page of an open book. The words are difficult to decipher due to the cursive style but appear to include:

か  
久  
は  
は  
は  
は

は  
は  
は  
は  
は

—  
1854

1854

1854

1854

1854

横濱

今日

1854

1854

1854



岡村 菊 叟

名忠香、後菊叟、通稱十郎兵衛、  
號竹園又觀瀾堂、俳號花隱逸又鶯老

翁は寛政十二年九月九日信濃國高遠に生る。幼少の頃より砲技を父忠鼎に受け其蘊奥を極め 後藩の砲術總師範となる。槍術も寶藏院流を能し印可をも得たりと聞く。天保十一年藩の執政となり爾後藩政の整理改革に努むること二十有餘年、齡六十にて致仕したれど維新の際再召されて藩政に參與せり。明治五年同地久保川に隱棲し書卷に親み、又歌詠を樂み、儂游自適の餘生を送りしが同十七年九月十九日年八十五にて歿りぬ。

翁は幼より和歌、俳諧を嗜み古學に志す。幕臣岡正武につきて國學を修め、粟原柳庵、前田夏藤、植松茂岳、井上文雄等と交游多年に亘れり。

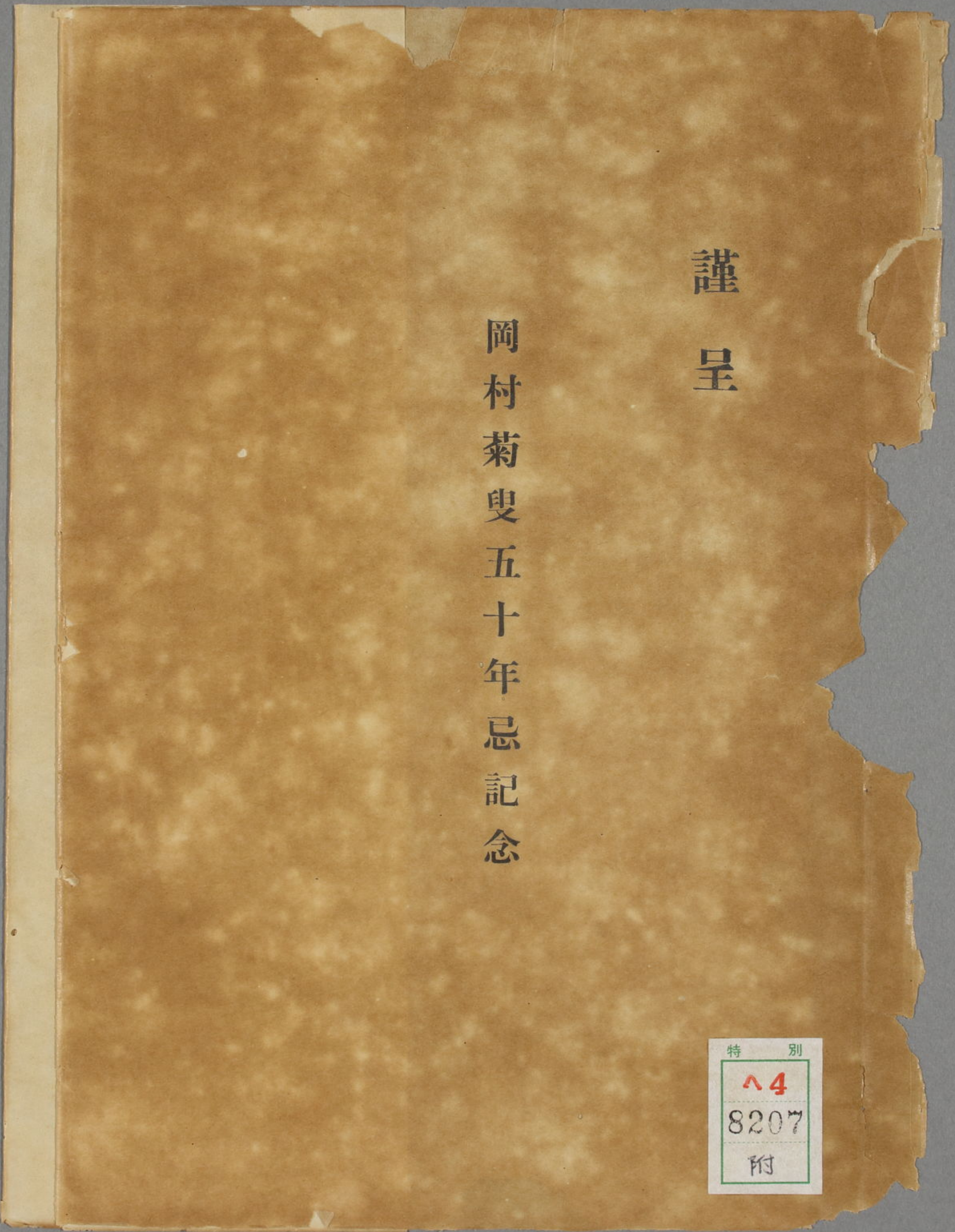
遺著は多く散佚したれど今家に傳ふるもの詠草十二卷十八冊あり。これも徒に篋底に藏して紙魚の住家となるのみなれば、雖は殘滅に歸せんことを憂ひしが今年癸酉九月、翁歿後五十年の忌辰を機とし本書を印行して親戚知友に贈り以て些追遠の印とする事とはなしぬ。上下二卷を合せて一冊となし巻頭に畫像を掲げ且讀み易からしめため所々文字を今様に書き改めたる外體裁はつとめて原本に倣へり。只校正疎漏にして魯魚の誤多からん事を恐るゝのみ。

昭和八年九月十九日

東都牛込の寓居に於て

孫 岡村 千 曳  
同 岡村 廣 海



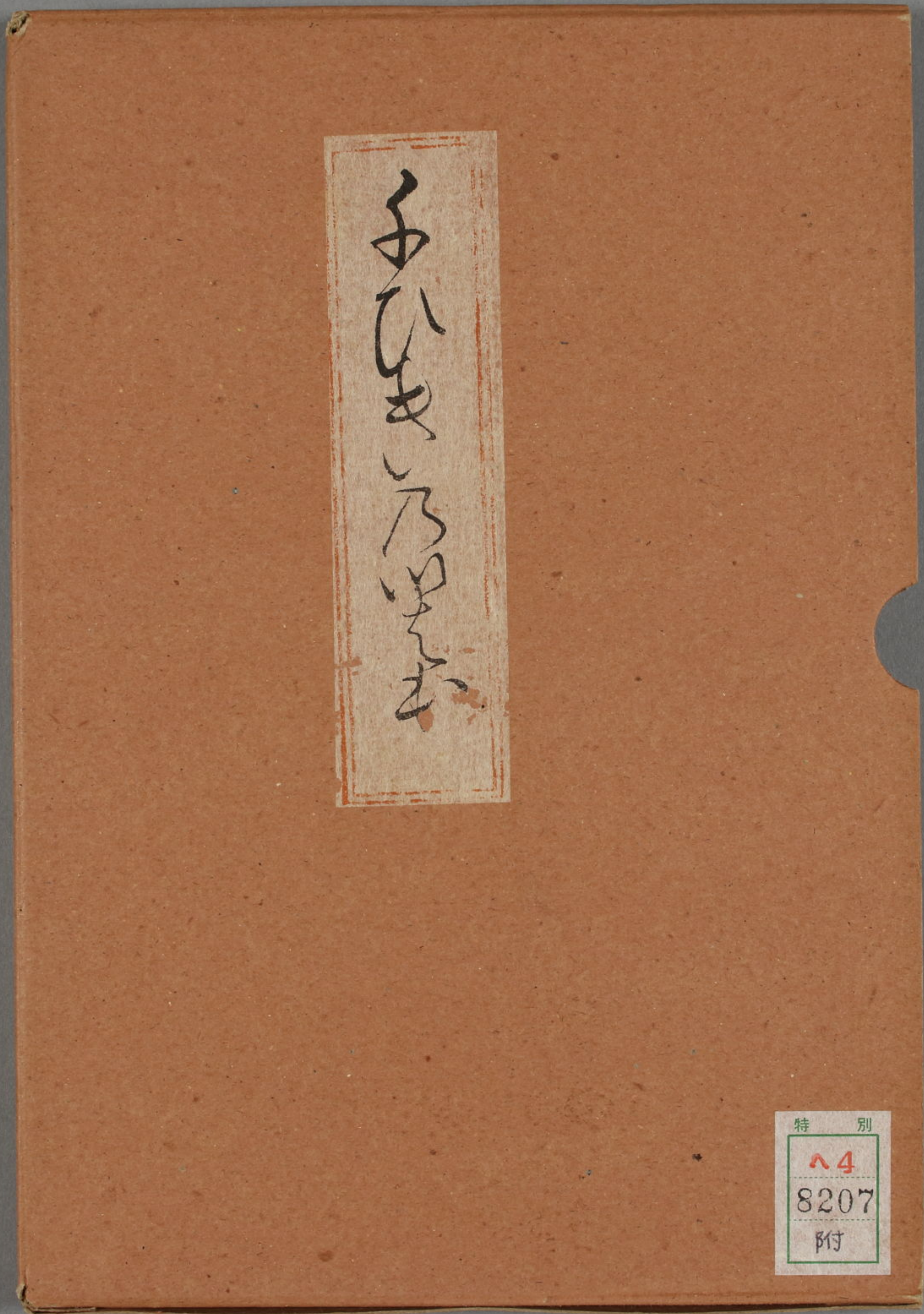


謹呈

岡村菊叟五十年忌記念

特別  
A4  
8207  
附





山崎 啓

特別  
8207  
附

